始

337
161

八雲香雪著

新式禮法書

◉向つて右を本床にして飾りたる圖解

序

禮は天地の節文、社界の秩序を保つ所以である、故に吾人にして禮儀の觀念無く、放恣粗慢自ら省みる處なくんば、綱紀爲めに壞頽し、倫常爲めに荒廢し、淫靡に陷らずんば暴謾に流れ、社界の風紀習俗は頽蕩し、彼の江河を決するが如く、其底止する所を知らざるに至るであらふ、吾友八雲香堂は禮法に精通し、儀式に習熟し、居然たる當代の一名家である、其婦操子と一室に居るや、夫唱婦和の道に適ふのみならず、縱令羈窓の朝客舍の夕も、操子の香堂を遇する、猶孟光の梁伯鸞に於けるが如く、膳を擧ぐる眉に齊しの概ありて、擧止最も謹むのである、夫れ禮の用は和を貴とす、而も香堂夫妻は之を日常燕居の際にも實行するのである、是以て人の師たるに足るべきでなからふか、香堂の禮法を良家の子女に教授すること茲に拾五年、其周

大正
3. 3. 14
刊交

游巡歷の間に自得する所は甚だ尠からぬのである、乃ち之を古今に參酌し、之を東西に折衷し、所謂「八雲流」の禮法を成就し得たので、更に進みて之を一部の册子となし、初學の子女に閲讀せしめ、禮法の何物たるを知らしむる事とした、其斯道上に裨益するや蓋し大なるものあらふ、近來社界の禮節作法散漫し、風紀漸く頽蕩せんとするに當りて、禮法を講ずるは最も必要なるを認む、單に作法を正し儀容を整ふるの末節にのみ拘々たるものと見ずして、實に社界の風教を濟ふに與りて力あるを思ふのである、今や香堂序文を求む、誼之を辭するを得ず、敢て一言を誌すこと〳〵した、

大正三年孟春

辱交　火西峰　英太郎

凡例

一、本書は小學校卒業の人が、家庭の實務に從事し禮儀作法の幾分を、了解すると云ふことを程度として、筆を起したるものなれば勉て平易に記述したのである、

一、假名遣ひに誤謬あるべし、讀者其心して讀んでください、

一、近時禮式に關する書籍の出版さるゝこと、汗牛充棟も啻ならず、然れども其多くは古禮を羅列したるもので、時に或は如何はしき書方あるを免れず、本書は著者が拾五年間實際につき教授したる「小笠原、武田、逸見」の三流より一派をなしたる、新式の作法を現代の社交現代の家庭に照應して、著述したるは勿論「作法講習會」の教授科目以外、幾多參考に供したる點多し

縱令は、「三々九度」後の式順に於けるが如し、之れ著者の婆心で此書が責任ある禮式書たる事を表白するに、躊躇せない譯です、

一、書中最も簡易なる科目、即、帽子の進受、傘の進受、小刀或は新聞雜誌等の作法を略したのは諸子の、研究に任せたる爲てある、今日迄の經驗と自信は決行するに難事とは思ふまい、

一、禮式に關する「故實」の說明を略したのは、冗長に過で讀者の嫌厭を慮った譯てある、折を得て講習會に望み、會員諸子の父兄或は青年會等に、講演する事にすれば卽ち風俗矯正の主旨にも適ひ、傍ら禮式の大体を了解せしむる便益があるので、著者は進んで其希望に應ずるのです

一、禮儀作法は溫習を以て始て會得するものなれば、此書が一回にても師友となることを得ば、著者の幸甚とする處である、

一、禮式の書は何分讀者をして、無味乾燥の感を起さしむると一般、著者も此稿を草するに當り、幾多の困難を感したり、そは意の如く筆の隨はざることにて、不得已、實習に讓る積りで略記したのである、

一、終に臨み本書に就いて疑点あらば、何時にても質問に應する事が、著者の責任であるから玆に特に告白して置くのである、

大正三春のはじめ、梅の蕾を破らんとする、

桑城の客舍にて、　著者誌す

目次

一、容儀……一頁
一、訪問及應接……十八頁
一、座禮……二頁
一、襖の開閉……二十頁
一、座り方……四頁
一、幅物の掛方及拜見……二十一頁
一、立方……五頁
一、扇の扱方……二十三頁
一、歩み方……六頁
一、燒香式……二十五頁
一、給仕方法……六頁
一、本膳式……二十八頁
一、煙草盆進受……八頁
一、湯桶の出方……三十頁
一、茶及菓子の進方……九頁
一、飯櫃の出方……三十一頁
一、茶菓の受方……十頁
一、給仕の仕方……三十一頁
一、吸物膳の進方……十二頁
一、汁の再進……三十二頁
一、立禮……十五頁
一、飲食の心得……三十二頁
一、途中行逢の禮……十六頁
一、本膳各種の膳立法……三十四頁
一、椅子に就ての心得……十七頁
一、三寶式……三十八頁
一、辞令書及證書の授受……十七頁
一、普通煎茶道具の取扱方……三十九頁

一、道具のあしらい……四十二頁
一、鐵瓶の沸騰する順序……四十三頁
一、順　序……四十五頁
一、跡仕舞……四十八頁
一、茶の客席……四十八頁
一、かけ捌き及羽織の着せ方……四十九頁
一、袴の捌方……五十頁
一、料紙硯箱の進方……五十一頁
一、婚　禮……五十二頁
一、嫁の身拵……五十三頁
一、門出の祝……五十四頁
一、嫁方を案内の件……五十四頁
一、婿方の出迎及嫁方の着席……五十五頁
一、最初の儀式……五十七頁
一、婿君の着座及三寶式……五十八頁
一、親と親との挨拶……五十九頁
一、三々九度の座配及床飾の事……六十頁
一、男蝶女蝶の舞初……六十二頁
一、三々九度の式……六十三頁
一、兩蝶の舞結……六十五頁
一、嫁と舅及姑の見參……六十七頁
一、本客の着席……六十八頁
一、本膳二の膳の進め方並親々の盃……七十頁
一、三の膳と結盃……七十一頁
一、床　盃……七十二頁
一、翌朝のこと共……七十三頁
一、婿　入……七十四頁
一、婚禮の際に於ける忌詞……七十五頁
一、結納の目錄……七十五頁

目次終り

小笠原武田逸見之三流一派

新式禮法

八雲香堂著

◉容儀

容儀は一見犯す可らざる、男子の体裁上、必用缺く事の出來ないもので、姿勢正しく着坐して居れば、先方は何となく其威嚴に打れて、一段と敬意の深くなるものです、それに反し初對面の其時よりして、氣輕な風を裝ふ爲か、愛嬌者と云はれたさにか、相好を崩し言語を慎まず、姿勢亂れて容儀整はざれば、一見野卑の風が現はれ、格式的に育ちたる家庭の人より見れば、忽ち厭な氣が起るやうになりますから、茲は男子の大に留意する點だと思ひます、

最も席も亂れ盃も飛ひ、互に胸襟を披き所謂「打寛ぎ」る段などは問題外ですが、儀式の際とか初會見の砌りなどは、特に作法上の容儀と云ふ事を保ちたいものです、今其男子の容儀と云ふものを御話致しますと、先、姿勢正しく下腹部に力をこめ、足の拇指のみを重ね、手は「八の字形」に膝に置き、眼は膝元より三尺餘りの向ふに注き、無論必用に應じては頭も體も動くのです、之れ男子が眞面目に搆へたる容儀です、略式にする時は、両手を膝の上に伸べ躰も初より少々動かして、話

なんか被成ても宜敷く、平常は組手と申しまして、昔は左手右手と男女により區別がありましたけれど、今は便宜上右手を上に組むのが宜敷く御座ひます、

女子は男子と異り膝の上にある、左の手に右の人指及び中指を載せ、他の指は離れぬやう揃へ眼の注き方も男子と同樣です、略になさる際も男のそれと同く組手に致します、全体、拇指を出すのは何流の作法でも必用のない、即、坐禮の時とか立禮の時とか、單に膝頭に置いて居る時などは、決して出さぬ事に定めてあります、羽織は襟折りと申しまして着坐の際、それとなく正しく膝側に引寄て置ます、女子は袖口の襦袢などことに注意なさるのが上品です、たゞ餘り反身にならぬやう、

◉座禮

坐禮は前述ました容儀が整ひますと直に必用を生じます、今其次第を述ますれば、七種の數に別れます即ち「眞之禮」「眞之略禮」「行之禮」「草之禮」「三指之禮」「額手之禮」「請坐之禮」であります、其内、眞之禮と眞之略禮は多く女子に應用し、行之禮と草之禮とは男子が行ふものです但、此作法は膝の前に何一つない時に限るもので、物品が一つでも出てまいりますと「三指之禮」を致します、次に「額手之禮」と申しますは、訪問の客に對し取次人が家の昇降口に於てする作法です「請坐之禮」と云ふは、主人が上輩又は普通の客に對する時、或は客と客との間に於て、其人を上坐に進むる際に行ふ作法です、以上の要領を心得て臨機に左の法を行ひます、

一、眞之禮　左手を少し早く膝前の疊につき右手を直につけ、左の人指の爪に右の人指を重ね中指は互に突合せ、顔と手の間凡そ二三寸もあらんかと思ふ處迄頭を下げます、其時は頭より早く臂が疊につくやうにすれば宜敷ひ、初め手を重ね頭を下げ、それから頭を上る迄の時間そふ正確にはゆかないが、一呼吸する迄之を詞にすれば、一――二――三、と云ふ位ひなもんです今少しく詳細に説明をすると、一と云ふ聲にて頭を下げ、二と云ふ聲には下げた儘、三と云ふのを聞くと同時に靜に頭を上げ、左手を少しく早く膝に直します、

一、眞之略禮　この作法は手の就き方は、眞之禮と同樣ですが只頭の下つた手との間、五六寸も離れて居るのです即ち時間も、一――二――と云ふ處で女子は普通之を應用致します、

一、行之禮　これは男子の作法で膝の上にある「ハの字形」の手を疊に移し（左手を少し早くつき、膝に上げる時も左が少し早ひ）指先の距離が二寸位、疊と額との間も五六寸程下げ、時間も亦一――二と云ふ位ひです、男子も絶對に眞之禮をせぬのではない、然し餘程敬意を表する人に見參でもする時の外、大抵は行之禮で充分です、

一、草之禮　疊についた指先が約四寸も離れまして、頭の下つた間が七八寸でせう腕の少し折るやうに致しませんと、只頭のみ下げましては不格好です、

一、三指之禮　これは應用の向も多く御座ひます、心安き人に對しては挨拶の代用にもなりますし

また承知の旨を先方に通ずる際も、詞と同時に此禮を致します、大体は膳部其外物品を受たる時の作法で御坐ひます、即ち左右の手を膝の前に揃ゑて立て、中指のみ疊につく樣頭を下げることです、茲に一寸御注意を致しますが、膳部に對して三指之禮をなさる時は、心ず中指の爪に眼を着くることを忘れぬようにしてください、膳の上に眼を注ひではちと下品です、

一、額手之禮　「御免ください――御宅で御坐ひますか、御頼み致します」と云ふ聲が聞ゑましたら「ハイ」と返事を與へて、取次人は出て參り其人を見ますと全く知らない人です、即ち高膝の儘左右の手を膝の兩側につき、拇指のみを前に現はし四本の指は後に伸べ、輕く頭を下げて來訪の譯を承るのです、此作法は訪問應接の所に詳しく述ますから、今はそれだけを心得ください、

一、請坐之禮　「若し其處では餘り――ズット御先に――」と云ふて、今お出の客に向ひ主人より敬意を表し着坐の席を知らせる法で、其人が自分より右にお出の時は左手をつき、右手にて知らせます若し左にお出の時は右手をつき、左手にて知らせ顔は心ず客を見る事です、そふして言葉と共に頭を下げるのです、正面の時は左手をつき右手を少し前に出し「どうぞ彼方ゑ、或は、どうぞ此方ゑ」と詞と共に頭を下げます、

◉座り方

直立したる左右の手は拇指を隠し、指先の離れざるやう兩股の上に直下したるを起立の姿勢で、今坐せんとする時は、即ち左の足を引き左の膝より先に疊につけ、左右の手にて衣類の裾を都合よく膝下になすと同時に右膝をつけて坐ります、之は普通男女共に其通り致しますが（男子の袴を着けました時は別に其方法を述ます）女子の方で、紋付の引裾と云ふ時は「小褄」を取り兩膝の下に重ねたる裾などが、不行儀にならぬよう注意致します、

◉立方

立方と申しますと男女共に三種の作法があります、即「大寄」「小寄」「普通之立方」と區別を致しますが、其方法は異りて居ます、茲には女子の分のみを述べ男子の立方は「袴捌き」の處に讓ります、「大寄」と云ふは左又は右に膝を廻す時に、其向く方の正面になるまで膝を廻すことです、「小寄」と云ふは、膝を廻す方面の斜向きになるまで致すのです、此時に「陰之膝」と云ふことがあります、即ち行く方に膝を廻した時客の前になる膝は必ず疊につけ、一方の膝を立てます其立たる膝を「陰之膝」と申します、

以上の二種は作法の上の立方で、若、大寄とか小寄とか出來ない時は別に其方法がなからねばならぬ、それを「普通之立方」と云ふのです、それは一應爪立ち右膝より靜に立ち右足を引くことです通常男子も女子も、之を應用なさるがよろしい、

◉歩み方

歩み方に就て第一に注意すべきは、敷居、畳の縁などを踏ない事です、昔は色々苦情を申して居ましたが、只今は高く足音をさせざること、大股と云ふて餘り長く踏出さゝる事と、鼠鳴きと云ふて摺り足をせぬ事だけ注意すれば宜敷い、然し足の裏が見へては無禮ですから、其積りで溫習を願ひます、子供は横の畳を三足づゝ大人は二足とすれば、左程困難は感じません、

◉給仕の方法

客は必ず正面及び左右に分れて座するものなれば、給仕人も其向きに應じて、物品の進め方をするのは一定した作法で、皆人の知る所だか茲に本式と略式の區別をわきまゑ置ざれば、迂遠に流れて敏活を欠き、給仕の本旨とする臨機の處置に對する事ができません、今本式と略式との給仕の方法を述ぶすと給仕の人は、正面の客に向ひ両人出づるとすれば「陰之足」と云ふて、右の給仕は左の

足より左の給仕は右の足より踏みだします、かくして客の前の畳にまで進み、左足を一歩引きそれに右足を揃ゑまた左足を引き左膝より先に畳につけ、座せし儘少し前に進み物品を置き、禮をなすに頭が物品に障らぬ處迄しりぞき、眞之略禮を致します、直に左右に分れて膝を廻し、下座に向直り「陰之足」より歸ります、此時は最前の足――即ち踏出初めの足の反對が陰の足になりて居ます左右の客、卽ち椽側の客と壁の方に座したる客です、其客に出す時は席の中央になる畳より肩を並べて進行し、凡そ茲だと思ふ處に止まると同時に左右に振向きます、下座の足より進み客の前にて左足より、一歩ひかれる後の餘地があれば正面の時と同樣にするのだが、八畳の座敷などはそふすると給仕の脊と脊と衝突するやうになるから、只左足のみ引き其儘座るのが宜敷ひ、最も一列に上座より出づれば障りもないので都合がよい、歸る時も上座に膝をまわし中央の畳まで下座の足より進み直に下座に向き陰之足より致します、是とても八畳敷では出來ないから、直接に客の前から下座に膝を廻して歸りてよろしい、

大廣間――學校の講堂と云ふ時に於て、立食的に膳部でも運ぶ際は以上述べたる、本式の給仕法によりますと、姿勢もよく歩調も整ひ客の目につき見事なものですけれど、何分一般の家としては八畳か拾貳畳が多ひから、給仕法も略式にするの已を得ない譯で――それも給仕人が熟練して居れはよいが、左なくば却て無禮を致すやうな事が出來るので、略にするのが宜敷い、

其略式の時は、第一客の前にて左の足を引き右の足を揃ゑませんで其儘座ります、第二座りまして

から進もせず退もせず、物品の進受をするに都合のよき處に座を占めます、第三本式の時は禮をするのですが此時は致しません（客は輕く三指之禮を致します）第四、左右の客に出でます時も中央の疊よりせず、左右の客のすぐ前の疊より進み、歸る時も前に說いたやう直接に下座に膝廻しを致すのです、別に一法として應用することは、先つ上座の客に出でゝそれから一方の客に出でます、無論正面の上客には一番に差上て置いてあります、

◉煙草盆の進受

煙草盆は客に出す前に、火壺灰吹等よく撿め汚ない物でも入つて居ては、御無禮ですから清潔にせなければならない、全体煙草盆は客の右の方ゑ置き、膝との間が五寸位ひも離れて居ませう、疊の緣に掛らぬやう押進めます、此時は茶も菓子も出しますので、右に寄て置ます、

灰吹を自分の左の方の角になし、拇指のみを側緣に掛け他の指は八字形に底に揃ゑ、手を伸し決して高く持ず、兩手の間より向ふ三尺足元の見ゆる如く捧げて出します、客は給仕人より禮をなします時は、三指之禮を以てしますが略式で――即ち給仕が置たまゝにして歸ります時は、男子は輕く頭を下げ女子は三指の形で一寸禮を致すのです、

煙草盆は給仕の置く位置が其通りに定まつて居ますけれど、客は手前に引寄てお吸ひなさつて宜敷ひ、然し餘り長く吹かすのは失禮です、煙もなるべく人の居ない方ゑ出し、殊に吸殼など高く音させて打出すのは無作法です、實は手の平にてするがよろしい全体客に行く時など、深く注意を用する事で煙草を好む人は、必ず煙管の掃除を怠りてならない、

火鉢は客の左側に出すのですが、之は危險なものだから子供には持せないで、初めより客座の都合を見計らい出して措くのがよろしい、大人ならば丈夫に持ち行けば別に此通りと云ふ事はない、

◉茶及菓子の進め方

茶碗を茶臺に載せ、左手に持ち右手を下に重ね、左右の拇指は茶碗の前に掛けその緣にかゝらぬやう持ち行くのと、今一つは茶臺の右の端を右手に握り左手に全体を乘せたまゝ、捧げゆく法と二種あります、何れに致しましても形の如く客の前に座り、右手にて右緣を握り左手にて左緣を握り、客の右の前に當る疊の緣のきわに置き、兩手にて一寸ばかり進めます、但し舟形の茶臺は横に出しますのです、眞之略禮をすると客は必ず三指の答禮――其儘立てば丁度煙草盆の時と同樣です、

菓子は器物に白紙を折り其上にのせ、器の左右を持ち拇指のみを横にして緣に掛け、他は八字形に下に揃ゆること前の通りですが、高く捧げて鼻口の息が菓子にかゝらぬやう、客の膝正面に押進めます、丁度煙草盆と茶碗と菓子とが膝前になりますので、置樣がわるいと亂れますから、給仕人も

注意を致しませんと、菓子が膝正面になりません、實際に於ては煙草盆は客より既に膝元に、引寄て居るから茶もいだしよく御座ひますけれど、若し其儘即ち出したなりに動かさずに居た時が給仕の手心を用します時です、

◉茶菓の受方

前の如く茶菓を運ひ終りますと、主人より「粗茶おあがりください」と云ふ詞があります、客一同は三指の禮をなし、先つ上坐の人より茶臺を引寄せます、其引寄方に就て二通り御座ひます、即、座りたまゝ左右の手を茶臺の両端に掛け、左手が先に右手が前になるやう、右膝の處まで引寄せます、今一つ頂戴せんとする際は、左手を先に右手を前に掛け其手が併行するやう、もと給仕人が出しました處に直します、別法は之を略にする時で男子は左手を膝に置しまゝ、女は左手を三指の時につくやうにして、右の手にて茶臺の右端を握り引寄せるのです、出します時も給仕の置し處へ右の手一方にて宜敷く御座ひます、茶臺が舟形ならば引寄る時が、立に、出す時が、横にするのです それから茶碗を取る時は、右手の拇指と人指にて少しく縁を持ち、殘りの指は外側に揃ゑ左手は添手となり、直に左手に戴せ右手の拇指が前になるやう之を挾み、乳の高さにすると同時に頭を下げ茶碗の中に眼をつけ、二口飲みて茶臺に置きます、其時は矢張り右手に摘み左手を添て置くのです

かく致しましてすぐに左側の方ゑ、懐紙を出し菓子を食するのですが、其菓子の食しやうは「大なるものは割り、散る恐れのあるものは添手して、散らぬものは食口の見ゑないやう」にするのが定りです、白砂糖のやうなものは一應紙に移し、手の平にて二三度押ゆれば固りますからそれを口にしますのですが、丸房露の如きものは、紙の上にて割り右手に持ちしのを措き、左手のを食します全体丸きものを口にする時は「三ヶ月」形にならぬよやう致します、饅頭形のものは一應をさゑをきし食するがよろしく、ようかん、の如きものは楊子にて取上げ手に移し、食口の見ゑぬがよろしく左れば右手にて口元のほとりを掩ふやうにすればよろしい、其外種々ありますけれど紙さゑあれば、大底の事は不作法なしに形がつきます

果實は洋刀を添ゑ、客自ら剝取るやうにする物です、物によりては匙を付けてもよい、此時にもし手など汚れました際は、懐紙にて拭き取り途中に捨ても宜敷きものは右の袖、宅に土産にでもすべき物は左の袖と定め置くのがよろしい

初め茶を二口飲んで菓子に移りて居ますから、殘りの茶は以前の如くにして取上げたなら、三口に て飲乾し茶臺に置ます、何回飲んでも其通りですが、飲ない時は左手に摘まみ右手を仰向になし、左手を添ゑて臺に伏せます、然し碗と臺と相應せざる時は其儘にして置くが、碗の底に茶の葉が殘り又粉末など付着して居る時などは伏せすに置いてよい、茶の飲み方も必ず二口と三口にせねばならぬと限つて居るのではない、平常の時澤山注がれ殊に熱ひ時など、到底規則通りにゆくものでな

い、そんな時は何度口を着けても宜敷いが、中で一應茶臺に置き又取上げて飲む事とすれば、普通の社交に應用するのだから、煎茶式と云ふ譯にゆかない然し茲には形の通り、茶碗も伏せ本の通りに出して置けば、給仕人より撤きますけれど、二度と手を取らせぬやう菓子盆の上に載するとすれば一度に濟む譯であるから相方の便利です、乍云、それも盆次第で――のせられぬなら致方がない菓子は、主人より粗末なれどお土産との詞ありし時、紙に包みて遲からず然し何其言葉がないならば、客の勝手だけれど直に袖にするは面白くない、所謂都合を見てやつてください、

◉吸物膳の進受

吸物膳は盃を右の縁へ伏せて枕をさせ、客の前に椀向ふ右に刺身皿左に煮物を据ゑ、左右の手にて持ち拇指のみ横に掛けて高く捧げ客の前に運び、一應給仕人は席を隔てゝ待合せます、主人は客に向ひ「粗末なる吸物お取りくだされたし」と挨拶を致します、客は膳を前に引寄せ左手を椀の側に掛け、右手にて蓋を取り左手を添ゑ、二三度露拂ひをなし左に置ます、総て蓋物は左側ですか疊に措く時は仰向きになし、膳に措く時は左縁に枕をさせるのです、蓋を取る時は注意をしませんと、飛でもない不調法を致します、蓋の糸底が摘み易ひのならよいが、摘まれぬ其時は左手を添て蓋の向ふを少し押ます、すると前上りに傾きますからそれを左は添たまゝ、右の拇指は前縁に四本の指は向縁に掛て取上ます、かやうにして蓋を取りましたならば、すぐ箸にかゝります箸は右手に上より取り左手を仰向になし之を移し、右手にて箸の頭を揃ゑ左手と併べて頂きます、それから右手にて又上より採り左手を添ゑ、音のせぬやう膳に置くのです、こんどは吸物椀を右手に取上左に移し右にて丈夫に持ち乳の高さにすると同時に頭を下げて之を載き、左手一方に委ね右手に箸を取り裏表に三度浸し、男子は靜に一振りして外に掛け、女子は椀に着けなから汁を二吸ひ身を二箸食し、又汁を吸ひて箸を置き、椀を右手に取り左手をそゑ膳に置ます、直にふたを左にて取り右に移し左は添ゑながら致します主人は「何卒お盃をお起しください」と詞を述べ、給仕は此時「湯煎」を持出て、上座下座に別れてからお酌に掛ります、

客は注いでもらつた盃をすぐさま口にせず、一應膳の上に置き何品なりとも手を觸て後に飲むことです、直樣くちにするは受吸ひと云ふて、嫌ひます然し、之は初の盃に限る事で二度目よりは、勝手に飲んで宜敷う御座ひます（盃の持方は茶碗と同樣）人に盃を差上る時は、正面ならば右手に限ります決して拇指を伸さず、手の平を少し凹めて差上ます男女共に、左手を添てやるのですが若し袖が邪魔になるやうな際は之を採ります、初對面の人と盃の交換でもする時は、相方膳より斜に向合ひ右手に盃を持ち差出します、此時盃に繪又は字など書いてありましたなら、先方より見て逆にならぬやう致すのです、之を受取る時は右手の拇指と人指にてし左手に載せます、かくして直に膳に向い給仕に注がせ一應之を措きます、昔は我盃にて三度飲ぬ間は交換など致しません法でしたが

只今は絶對的之を廢止する希望で――然し習慣上まだ〳〵、そんな譯にゆかない實に不得已る次第です、若、盃の交換を廢止すると云ふ事にすれば、之に換ゆるに如何なる方法を以てするかと云ば「詞の交換」と云ふことを御勸め申ます、詞の交換、と云ふのは盃は始終自身のもので、交換されて居るのは詞ばかり之ならば、如何なる人と交換しても――何も考るる必用もない筈です、

刺身や煮物とかは一應吸物を右の如くにして濟まし、盃を起し二三度飲んだ後に先つ刺身より箸を着けます、刺身は猪口のみを抱ゑて食するのがよろしく、或は又皿を抱ゑてもよい、

それから吸物はそのなりにして居たのだから、今度は身より食し汁を吸ひますと大概それでなくなります、新に給仕が運んだ吸物とても初めの通りにして、最後に又以上の如くすれば宜敷ひ、之より先は肴が數多く出て參りましても、吸物が何度換りましても自由勝手に食して飲んで、愉快に陽氣に――隱藝でも――端歌でも――興味が湧くに從ひて、それ亂に及ばざる限りは氣隨氣儘に、主人も客も打解くるは宴會の目的なので、咎立てする必用もなく又そんな不粋な人もあるまい、

お酌は「湯煎」を待出、客より盃を指出された時は必ず爪立ちて注ぐものです、爪立と高膝とは間違ひ易きもので、こんな時は高膝ではない、かがと〻尻と離れぬやう爪立ちます、平生の客には其儘お酌してもよいが――いや時によりては左手を畳につき、右の手一方でする事もあります、然し大勢の客ある際は大に活動を要しますから、爪立ながら、膝で進退して拔りなく心を注ぎ、決して其人の前にのみ安閑として居てはなりません、

湯煎の持方は、左手に下の方を確と握り右手を出口より二寸位ひ下げ、拇指にて受け四指は下に揃ゑて致します昔かゝち「晝九、夜八、船七、馬六」と申しまして、晝は盃の九合目夜は八合目船の上では七合目馬の上では六合だと、云ふてあります然し世の中には、晝十夜十いつでも十の連中もありますから、座を見て法を說けと一般絃給仕人の機轉處です、

◉立　禮

立禮に三種の別をして御話いたします即ち「最敬禮」「敬禮」「普通之禮」です、最敬禮と云ふは高貴の御方に對し、滿腔の敬意を表する場合になさる最上の敬禮です、次に敬禮と云ふは上輩又は年長に對して敬意を表し、普通之禮は通常一般に多く應用するものです、立禮は座禮のそれよりも眼の注ぎ方に重きを置くのです、一時我國に於ても「目迎目送之禮」を軍隊などに用ゐたことがあります位ひで、必ず注目を忘れてはいけない、

今最敬禮より其方法を述ますと、拇指を隱したる左右の手は兩股の上に直下し、眼を注ぎ額と帶と同じ高さになる處迄、手を膝頭に垂れ襟首など見へぬやう靜に頭を下げ、一呼吸の時間にて靜に頭を上げ、再び眼を注ぎし後前方一間半もあらんかと思ふ所に眼を落します、敬禮は額と腰部と足とに若し線でも引くならば、立し三角の形ちが出來ませう、普通之禮は腰部以上を少し屈せます、足も女子は少し角度を取り男子は五十度より六十度に致します、

◉途中行逢の禮

上輩又は年長の人と途中に於て出會したる時は、左の方るよけ一間ばかりの處に踏止まり、斜に向き敬禮を致します先方が一歩でも踏出さない前には、此方から歩み出さぬ事に注意致します、先方が其儘止まつて居るならば、何ぞ話がある時で――無論用事がないならば直に行過ぎます、其間長い時間を取るのでなく一寸のことだから、注意するのです只禮をすれば足るものだと思ひ――先方がまだ足も出ない前に、チョコ〳〵と小走りするのは失禮です、

洋傘など開がずに逢ひました時は、左手に持換る右手は膝頭に直下し姿勢正しく敬禮をなします、子供などは左の脇下に狹み兩手を下げさせ禮を致すのがよろしい、携帶品があります時は都合よくしませんと、却て可笑き動作となります、男子が帽を取る時は右緣に手を掛けて――軍帽見たやうなものは、廂をとり何れも裏の見るぬことに注意し、左の方より右膝の處に持つてきます、若し雨降りの際に傘を持ちしまゝ、敬禮を致します際は左手に移します即ち傘の柄で、先方の顏を立ちきらぬやうするのです、天氣の折りには開いた儘左に倒し兩手に柄を持ち敬禮をして宜敷ひ、

途中同輩ならば無論併行するのですが、年長とか上輩の方と同行する時は、何時も其人の右脇で一二歩遲れて行くことです、若し其人が途中にて他人る出逢ひ、話などせられる際は特に退きて其終

るを待ちます、闇夜に長上の人を伴ひ提灯を携るる時は、左の手に持ち右手を柄に添る長上の右脇に二三歩程先に進み、我影を以て路の暗くならぬやう注意いたします、以上は支那の國に「雁行之禮」と云ふ事が書に見るます、多分それより起因したのでせう、

◉椅子に就ての心得

椅子を與へられたる時は左側に足を揃るて立ち、一禮の上に右手を椅子に掛け右足を踏出し、椅子の正面に出で足を揃るまして、少しく體を屈め靜に椅子により、上半身は眞直にし兩手は膝に致します、椅子を離れます時は、左側に足をそろるて一禮の上に退きます、椅子にかゝりたる人に敬禮をする時は、三尺餘りも手前に止り禮をするのです、又受けたる人は上輩ならば直に起ち、下座の方る出で敬禮を致します、同輩ならば我前に來る時起ちて答禮をなし、下輩の時は其儘です、

◉辭令書及證書之授受

側立の人が其證書を受けとる人名を呼に隨ひ、右手に持ち左手を添る字頭を我方るなして之に授けます、受くべき人が禮をなす時頭を下げます、受る人は呼出に應じて進み一間ばかりの前に踏止り敬禮をなして陰の足より（左右の足を定めてある式もありますけれど、來賓の席に對する反對の足

即ち陰之足より進むのが適當だと、思ひますから其通り御承知を願ひます）三歩進み、渡されたる證書を右手に受け左手の平に載せ、之を頂き左の足より三歩退き一應披き見て敬禮をなし、高く捧げて歸ります、若し略式に何枚でも重ねて同時に渡されます時は、右手にて手前の右の端を採り左手は直中の後になし、捧げて歸るか或は之を二つに折り、右手に持ちて歸りましても宜敷ひのです

◉訪問及應接

「御免ください御内で御座ひますか――御頼み申します」と云ふ聲が昇降口に聞ゑました「ハイ」と返辭を與へて、取次人が出て來り下手の方ゑ高膝をなし（立物あらば靜に開き）先方に眼をつけますと、全く知らない人です直に額手の禮をなし「どちらからで御座ひますか――何か御用で」と來意を聞き、先方が差出す名刺を受取り主人在宅ならば「暫くお待ちください」と立ち、其旨を通じますと、面會すべく許可が出ました此時出來りし取次は、眞の略禮をなし「何卒あちらゑ」と案内して客間に通します、訪問者は名刺を出す時自身の姓名の頭に、拇指のみを現はし他の指は裏の方に掛け、少し向ふ下りにして差出します、女子ならば添手をし男子は左の手を膝に垂れます、こんな時は小腰になるのがよろしい、取次人は名刺の右の角を取り左手を裏に添ゑ、一應受取り輕く頭を下げて前の詞をつかい、主人に通ずべくこゝを立ちます

訪問者は体度そなはり詞遣ひも丁寧に、所謂簡單明瞭に話します相手が、書生だからとて女中だからとて禮を缺がないやう、帽子は門を入る時右手に取り歸る時も門を出てから冠るのです、外套などは昇降口に立つ時實は拔いで訪問するのが禮ですけれど、當今は女子に或る程度迄羽織を許すと一般、男子も取次人迄は默認するの狀態なので――然し訪問すべき家が、高貴な御方とすれば絶對に略裝は許さない、イザ御案内と云ふ時は外套とかマント類は手早く拔ぎ、掛ける處があらば帽子と共に行儀よく――其附近に見當らない時は、通り間の通行に妨げならないやう整ゑて置のです、特に注意すべき事は、取次人が主人公に訪問者のありし事を通知に行しあと、邸内など決して覗くやうなことをせぬやうお心掛を願ひます、

取次人も亦此時は大に注意を用します、家庭の狀況がほぼ推察が出來ますから、先方の詞即ち訪問の理由などは、確に要領を得迄は何度尋ねても宜敷ひ、身飾りがどんなに美麗だからとて其姿を見るなり、平伏的に出るのは主人の見識にも關しますから矢張り、額手の姿勢で――取次人の敬禮たる作法ですから遠慮もないことです、訪問者も主人が出て來れば丁寧に挨拶をなし、來訪の理由を話し餘座しては失禮です、全体訪問の時間は午后二時頃より四時迄か、せめて晩なれは七八時から九時、適當の時間と致します食事前とか朝などは、一家の用務がそれ〳〵御座ひますので訪問者の、ゝすることです、主人の應對も亦親切を極め、客の歸り去る時などは玄關迄立ち先方が門を出

或は後姿を向くるまで立つた儘でもよいから見送るのが宜敷う御座ひます、

◉襖の開閉

襖の開閉をなすには、本床及添床の方位により開閉の異なるもので、今は左が本床で右が添床の處にして説明を致します、若し右が本床でありますす時は左の反對になるばかりです、さりながら何が本床にしても、開く時は向ふから閉く時は後よりと云ふ事は定まつて居ります、且又女子は引手を開く時は一方の手にて袖を取り、閉ぢる時は一方の手は疊につく事も定まつて居ます、

先づ開きます前に「御免ください」と聲を掛けるか、或は咳拂ひをなすか兎に角今この襖を開くと云ふ知せをなした上に――左様して後でないと、不意に開ては不都合を來すことがあります、下座の方即ち添床の方ゑ腰を据ゑ、高膝の儘向ふ引手に手を掛け（右の手）三寸斗り開き（女子は此時左手にて右の袖を取る）、此度は左手にて手前の引手を少し開き、此時は右手にて左の袖を取ります、直に右手を疊につき左手にて手前の襖を充分に押開ます、（敷居より五六寸上の縁をなるべく紙の處に手を掛ぬやう）如斯にして開きましたならば、二膝ばかり退き一禮をなし其儘爪立ち、下座の膝より敷居を越ゑ、両膝を入れ高膝の儘即ち爪立ちたるまゝ之を閉ぢます、

閉ぢます時は左手をつき、右にて縁の下の處を充分に閉ぢ其手にて其襖の引手をまた閉ぢます、今度は左の手にて向ふの引手を閉ぢ両縁を合せます、用事がすみ其座を立ち襖の處にきて爪立ちたるまゝ、向ふ引手を左にて二三寸開き今度は右手にて手前の引手を開き、直に左手をつき右手にて下縁を充分に開き、体を向け直し右の足より敷居そとに出で、左足を出すと共に大寄の形で膝を回し体がいでましたなら、爪立ちたる儘右手を疊につき左手にて下縁をせき、其手にて引手を少しせき右手にて向ふ襖の引手を合せます、以上は本式であるから至極丁寧の遣り方ですが、之を略にする時即ち行之開閉は、本式のそれと開閉は違ひない只出入の際、下座の足より立禮の時の敬禮の姿で入りますのと、退きます時も敬禮の形で左の足より引く事が違ひますだけです、無論立て出入をするのだから本式の膝行とは異なる筈です、

今一つ之を略した草の開閉は、一間に二枚立ちの時か或は四枚立の二間でも、開閉は一枚しか致さない時は、左手にて引手を開き其手にて縁の下の處を充分に開きます、起ちて入ります際は立禮の時の、普通禮と云ふ形です即ち右の手にて縁の下をせき、左手にて引手を閉ぢます出る時は右手にて、引手を少し開き其手にて下縁を充分にひらき、上座の足より出で左手に下縁を閉ち右で引手を閉合せます物品を持運ぶ際は、一應開きました上先にそれを置き身体をあとより入るのです、

◉幅物の床掛及拜見

床に幅物を掛ける時は、添床の方に座を占め「鶯竿」を右側に取出し、幅物を持ち横にして左手に

中程を持ち右手に紐を解き（紐の事を喙木と云ふ）、一文字現はれる所迄ひろげ疊に置き、左手は中程を持ち右にて竿を採り紐を竿の筈にて挾み、立上りて陰の足より床の前に進み釘に掛け、左に持し中程を少し繰下げ、右手の竿を中程を持ちし左手の拇指と中指以下の指にて引下げながら渡します、それを今度は右手にて筈の少し下を持直し、左は軸を少しく繰下げ右手の竿を壁に立掛け、直に左右の軸を握り高膝になる迄之を卸し、一應退き正しく掛りしか否かを見定め「風鎮」を掛け右手に竿を取り左を添ゑ、書椽の方に膝を廻し左足より退き、添床の方ゑ着座をなし竿は直に小床の所に立掛け、客の方ゑ向直り御覧くだされたしと挨拶を致します、

幅を落す時は鶯竿を左右に持ち、前の如く床正面に進出で竿を壁に掛け、風鎮を卸しましたなら兩軸を卷上げ、次第に立上り左は幅の中程を持ち右手にて竿を取り、一應左の手に托し右手に丈夫に持ちし上、掛りし紐を竿に挾みて之を卸し其儘書椽に向くと同時に、左足より三歩ばかり引き以前の處に座し、疊に置いたならば竿を右にをき左右の手にて卷收め、紐を結びて竿と共に添床の方ゑ直します、以上は只掛卸の作法で實際の時は、掛けたなりに致して置きます、

別に掛方の法があります、それは鶯竿と軸物とを揃ゑて同時に持出で、床の前に座し之を開きて掛けるのです、三幅對のものは眞中に「松」椽の方ゑ「竹」小床の方ゑ「梅」と掛ます、其他「雪月花」でも「天地人」でも其通りです、客は主人より右の如き挨拶がありましたならば、床の前一枚の疊を隔てゝ座し一禮を致します而して、拜見をなさいます時は先づ書なり繪なりの順序を見て

冠冐落款――其人の雅號――天地左右の表裝――等を拜見致します、繪の時はたとゑ繪中に書ありとも必ず繪より先に拜見し、書は後にすべき者です其繪を「讃したるもの」だから、即ち繪が主眼だと思召を願ひます、普通の際でも招待を受たる時一應床の前に座し一禮の上、「額」、「幅」、「香爐香臺」、「生花」、「床置」等、順次に拜見すべき事は客の作法である事を御承知ください、直樣我席に着き膳部――其他の物品に掛らねばならぬやうな時分は致方ないが、まだ二三の人しか見ゑない時、床の間に對し一禮もせず世間話しに耽るのは、失禮ですから必ず床の前一枚隔てたる疊に座し敬禮を表し左の順に從ひ一通り眼をとうします、最、生花のみ拜見する時などは、初より眞の略禮をなし終て又其禮をするのですが、床之間全体に渡りて拜見なさる際は只初と終りに禮をなし、それからそれと移る時は、三指の禮にて差間へありません、床の前に進みて印鑑でも詳細に拜見したい時は主人に其旨話したる上、進んでよろしゆふ御座ひます、

◉扇の扱方

扇は主人の前に座すと同時に右の膝より出ない所に置き、挨拶をして包錢にても差上んとする際は、扇を兩手にて開き其上に乗せ右手にて、「要」を取り左手を下にすけ右ゑ廻し要の方が、主人の前になるまで――それを左右の手にて前の親骨の端を持ち膝の前に押進めます、

主人公は右手にて要を取り左手を下に添ゑ（扇の裏に）、一應之をいたゞき包紙の前の右角を取り左は中程を持ち、拇指を隠し只乗せたる迄です、包紙を取る時中程を持し左の拇指が上に乗ると、丁度手探りして居るやうに見ゆるので――川柳に「村端れ布施の脈見る坊主哉」と一本やつたのは穿つたものです、閑話休題主人は包錢を受取り扇をたゝみ、禮の口上よろしくありて向ふに廻し右手にのせ、左手を疊につき其儘返上致します、

扇を略式に扱ひます時は、中程を二三枚開き要が我左側になるやう、包錢を初めより先方に向けて之に置き兩手にて扇の兩端を押進ます、受取る時は扇其物は其儘にして包錢のみを前の如く頂き、扇をたゝみ向に廻し、手前の頭を少し握り疊に措きて返しますが、全体扇に就て古來定りたる諸種の儀式があるのです、然し只今は左様に四角張る譯けにゆきませんけれども煽ぐ品物でない事は御承知を願ひます、儀式と名の付く時は春夏秋冬必ず携帯す可きもので、秋の扇と捨てられて――なぜ、云ふのは當らない、至極眞面目な性質を持つて居るのです、高貴の前に於て矢鱈に煽ひだりまた玩弄物にしたりするのは、無禮此上もないことです之は古流の通り、二三枚開き下座に向直り袖口より風を入れ、汗のにほひとか髪の油の氣などが通じないやう、注意すれば宜敷く通常は全体開ひても咎め立てする必用もないから、右の作法の下に煽ぐのは差閊へありません

※※※※※　※※※※※　※※※※※　※※※※※

「主人には禮事すべく、諂事すべからず、諂へば其眞を失ふのみならず、其事ふ所を失ふ」

◉燒香式

燒香式が大切なる儀式である事は申迄もない、即、「冠婚葬祭」の四大禮と云ふ内なので、謹慎に謹慎を表しこの名殘りの儀式――人間萬事の終りをかざる葬式、よし百歳の老人でもまだ言語を解せざる子供にしても、哀悼無限の意を現はすはなべて人の常であるから、正肅に營む可き者であるさて當日自宅出棺と云ふ事になりますと、親戚一同沐浴齊戒身を清淨にして喪服を着け、行列の順序整しく、式場たる寺院の本堂に練込み本尊前には、「導師」が端然として立ち死者は幾多の、吊意を表したる旗とか花とかに飾られて、棺内長へに眠り遠く九泉の下に旅立べく、哀れ果敢なき人間の命、電光朝露のそれと等しくさてこそ平生の修養が大事であらう、かくて導師の前方に安置され堂内總て哀愁の氣充ち滿場寂として聲なく、坐ろに亡き人の面影を慕ひ正に喪主の悲みに同情を寄せつゝ、棺の左座に親戚石坐に一般の會葬者が靜坐なしたる其中に、導師はしづ〳〵立ちて棺前に進み、各宗相當の式を擧げ「香」を燒きて復席すれば、喪主は力もなく〳〵に袴の捌きもいと慵く、導師の前に敬しく一禮し棺前に進みて平伏なし、右の足より立上り三度香を頂きて火中し、三歩退き手を合せ涙と共に「禮拜」を致すのです、次に肉綠深き親戚より喪主の如く燒香をなして、一片の口上を述ます即喪主に代りたるもので――それは會葬の禮である簡單によいから、聲の徹底

するやうに述ぶる事です、それより順次に燒香を終るのですが、一般の會葬者は設けの机により香を燒き、導師先退席乘僧も此座を立ち、一般の會葬者もそれで靜に退散を致します、親戚の人は最後迄居殘りますから、昇降口とか勝手ゐ通ずる道筋の間には着座なせいのがよい、最も寺院により右が親戚で左が一般會葬會と變更せなばならぬ處もあります、それは本堂と厨の都合ですから要するに、親戚は厨の方ゐ看座せぬと云ふことに承知して居れば宜敷ひ、

今燒香の方法を述ますと「お先に失禮を致します」と口上を述、導師の前に着座し一禮をなし一般會葬者の方に膝を廻し、棺前に進み一禮をなしたる上立上り（机が低ひ時は爪立ちてよし）用意の香を取出し、机に置いてそれを右手の拇指と人指で、三度摘みては頂き摘みては頂きして火中に投じ、二三歩左より引き着座をなし合掌禮拜を致します、その香を摘む時は殘りの三指は正しく揃ゐて伸すのです、もし香が机に備付ある時はそれを燒いてもよろしいが、茲に注意を用する点は其香を頂く時、左手を添ゐ眼は必ず閉ることです、それから膝を廻し導師の前に座り一禮の上に、我席に歸りますが之を略式――燒香式を略にするのは、抑、間違けれども人數が多く殊に日も早西に入ると云ふ時分は、又己を得ざる譯なればあながち不必用とは申されまい、それは初め導師に一禮し直接机の前に進み、すぐ香を一度燒き二三歩退き合掌禮拜をなして、我席に歸ることです、

念珠は全体左右の手に掛くるものです、略の物でしたら男子は左女子は右と區別もした法があります、然し各宗により持方が異りたるものもあるので、左樣御承知を願ひたい、

禮拜と云ふ事は、「接足作禮」の式でそれを略したものです、卽、手を合せ頭が膝の處迄下つたのを「一禮」と云ひ今度は、手を疊に仰向にして八字形になし更に頭を下げたのが「拜」と申します、或は禮の形より拜の形に移る法として、男子は「行之禮」女子は「眞之禮」をなさつてもよろしい兎に角、燒香の式は嚴肅にして充分喪主に同情を寄せてください、

序に御話を致しますが、亡人の初七日には親戚知已を招き、讀經を請ふて生前の物語など悲しき種も數あるべし、それより二七日三七日四七日五七日六七日七七日は言ずもがな、亡くなりし翌月の其日を「月忌」又は「たち日」と申し、僧侶を呼びて丁重なる讀經を請ふは勿論、百日目には百ケ日一周忌さては三回忌、七年目には七回忌と次第に遠くなり行て十三回忌に十七年、遂に三十三回となり果は五十回忌に百年忌と、思へば心細き次第だが祖先の忌日を怠りて尊敬の念うすらげば、身の爲ならず家の爲にも酬ひが來て、立身出世は愚なこと家の繁昌覺束ないから、人として追福を怠り又安魂の宅たる墓所の淸めは決して忘れぬことです、過ぬる明治七年の十月時の太政官より、普く達せられたる「忌服令」を今茲に、

父母	忌五十日	服拾三ヶ月	養父母	忌三十日	服百五十日		
繼父母	十日	三十日	夫	三十日	拾三ヶ月		
妻	二十日	九十日	嫡子	二十日	九十日		
末子	十日	三十日	養子女	十日	三十日		

夫　父母	三十日	百五十日	曾祖父母	二十日	九十日
祖父祖母	三十日	百五十日	伯父伯母	二十日	九十日
兄弟姉妹	二十日	九十日	異父母之兄弟姉妹	十日	二十日
嫡孫	十日	二十日	末子	三日	七日

其他は三日の忌と七日の服と云ふことに定めてあります、別に「重服忌」と云ふことがある、それは亡父を追悼するの涙まだ乾かざるに無常の風は、新に母を誘ふて夜半の煙となすことあり、此際は母を失ひし其日より數ゑて、五拾日の忌と拾三ヶ月の服是ぞ至當の事として、子たるものゝ勤むべき義務ではあるまいか、序に「扇」のことを申上て置ませう、葬儀の現場には携帶すべきも、燒香の時は今迄着坐して居る處に置き、棺前には持つてゆかない夫も「中啓」と云ふて、或向に式の際携帶すべく許されてあるものなら宜敷いが、只今一般に取扱ふ扇の如きは、廣告用でないと書畫などを書いたものが多いので、それはいけない「白扇」に限ります、

◉本膳式

本膳には諸種の法式がありますが、今茲に述ますのは普通一般に、應用するものを撰び別法は圖を以て後に御知せ致しませう、自体本膳と名のつく物は如何に簡略のものとは云ゑ、必ず儀式の際に

用ゆべきものですから、客も其心をして膳に向はねばなりません、既に給仕人が法の如く膳部を運びますと、主人か又は接伴役が一應の挨拶があります、客は「三指之禮」を以て酬ひ、直に膳を引寄せ「膳直」を致します、膳直しと云ふことは飯椀、汁椀、平、鱠、坪等を都合よくするのです、器具の蓋を取ります時は一番に飯、次に汁次に平を取り膳の左側に手前より併べ、平の蓋に坪の蓋を重ねそれに飯椀の蓋をのせ、又其上に汁椀の蓋を重ねますと四杖重になります、それを膳の下に入れますが、必用に應じてば其内を取出て宜敷ふ御座ひます、

箸は袋に入れてありますなら、左でその端の方を押ゑ右手にて箸頭を引出し、袋の上に置き形の如く頂きます、引割箸の時は先づ之を割り一應頂きし上膳に置くのです、

最初に「飯」を取り之をいたゞき、箸を持ち二口食して箸を置き「汁椀」を取り是をいたゞき、箸を取上裏表に三度浸し、其儘汁を二吸なし身を一箸食し汁を一吸ひ致します、それで汁椀を置き今度はしを持ながら「飯」を二箸食して置き、「汁椀」に移りて實を喰ひ汁を吸ひて椀を置くのです、又「飯」に移りて二箸立てそれから箸を置き「平」を頂きます、平は當座に於てはしを立つるやう料理を致して御座ひましたなら、汁より二吸ひ實を一箸と食しませうが――多く客の家に送る積りで拵ゑたのが多いから、そんな時は只頂くばかりにして置くのです、それから「飯」に移り又二口食して是を措き、箸は握りたるまゝ「鱠」を一箸致します、鱠の汁は吸ふ可きものでなく又抱ゑ持つべきものでない、女子は初めだけ箸を措き懐紙を取出し、右手にはしを採り膳部に汁の落ち

ざるやう、御注意あればまことに上品な奥床しき仕草です、それから「飯」に移り最後に「坪」にゆき是を頂き箸を取り、食しましたなら「飯」に歸るのです、「一順之箸立」とは此事を申ます、兎に角鱠の外は、初めて食する際必ず頂くものです、一順のはし立最中に飯が盡ましたなら無論換ます、汁は一椀限りで止ないでかゆるが宜しい、然し取ない時は一番にふたを致します、香の物は湯を頂戴する時食します、飯椀の中を湯と共に掻混ぜるなんて、そんな事は決してするものでない後に、二三食事に關する事を御參考に供しませう、既に一順の箸立が濟みましたなら何品からでも、勝手に食してよろしいが茲に心得置く事は、「飯之菜一種」宛に限つてある事で、菜から菜に「移箸」をせない事です、以上の如く總て食し終りましたならば、順次に蓋を致し箸は懷紙にて拭き清め膳に收めます、膳の持方に就て一寸御話し致して置ますが、高足の膳は兩緣に左右の手を掛け持つのですが、猫足即杏葉形は右手にて右の足を握り、左手は下の中心に當る底にすけて高く持ちます、

◉湯桶の出方

食事が終りましたなら「湯桶」を出します、湯桶は右手に柄を持ち左手の拇指にて蓋を押ゑ、出口の處が正面の客に向ざるやう、左斜に持行ましして高膝のまゝ注ぎ廻ります、然して給仕は下座に扣ゑて待合せ居ります、是は若し再進を請るゝ事がありました時に持行爲で——客が箸を收めましたなら退ります、

◉飯櫃の出方

臺に飯櫃を載せ前の方へ「杓子と箸」とを置き、兩手に持ち敷居際に進みて座します、直に蓋を取り上座の方へ「の」の字の形に之を取り、露拂ひを致し臺の横の所に仰向になし枕を致させます、杓子を取り飲を脇の方ゑ剝寄せ「二杓子半」程都合よく盛り、上を押ゑて給仕人に渡します、此法に就て古流では、實に複雜の手數が掛ります、當今は以上述ました處で充分です、さりながら飯を盛る時でも、給仕に渡す時でも拇指などが、椀の内ゑ掛らないやうにせねば嫌ひます、

◉給仕の仕方

飯の給仕を致します時は、盆の兩緣に拇指のみを横にかけ、他の四指に八字形に下に揃ゑ客の前に座り、平又はなゝすの上にあげぬやう膳の高さに差出します、然し客と客との間が離れて居るならば、下座の方より差出してよろしい、萬事活動を用する時ですから八方に眼を配り手落のなきやうう願ひたい、一歩退き踏揃ゑなんどはこんな時に、被成のでは御座ひません、略にする時は左手は

つき右手に盆を持ちてよろしい、古流では飯は手にて汁は盆にて給仕を致しますが、只今は両方共盆でなさつて差閊へ御座いません、

◉汁の再進

盆を持出て椀を受取り、汁を注ぎ「換蓋」を致しまして客の前に座し、蓋を取り盆の縁に枕をさせ両手に捧げて差上るものです、

◉飲食の心得

上輩、年長等敬意を表する人の前にて、食事をなさる時は箸は短く持つのが宜敷ひ、箸を置くは元の方を右の縁にかけ、食事終らば懐紙にて拭き、膳の内ゑ入れて置きます最も會席膳なんぞは、食口の處を左の縁に置く事もあります若し「箸枕」と云ふ物があります時は、始終それに喰口の處を枕させて置くのです、今箸に關したる注意五六條左に紹介致します、

一、箸なまり、是は鱠を食んか和物を食んかと、見合すことで見苦き限りです、

一、移り箸、燒物より忽ち煮物に移ります事を云ふのです、菜は一種宛食するものです、

一、握り箸、一方の箸につきたる飯粒を一方の箸にて落すことを申します、無作法です、

一、もぎぐひ、箸につきたる飯粒を其儘口にて舐取ることで、犬喰ひと一般下品千萬の事です

一、こみばし、口中ゑ箸もて押込むことです、實に不体裁の限りです、

一、探りばし、これは又何ぞあるやと、探り見ることで見苦き絶頂

一、まわり箸、香の物にて湯茶を、ぐる〳〵と掻廻すことで、失禮失禮、

一、そらばし、何か喰んものと既に箸をつけながらそれを食ひもせず、箸を引く事です

一、涙箸、鱠や刺身を食する時、露が膳に落ちることを申します、

一、膳越、膳の向ふにあるものを取上もせず、箸を遠方ゑ延して食する事です、

一、犬喰、ウツムキたるまゝ兎角の挨拶もせず、前後を忘れてムシャ〳〵やることです、

一、箸突、是は箸を膳にて音するやうに、突揃ゑることで無禮の極みです、

まだ外にもありすけれど、凡そ右の件々にて宜敷かるべし、何れも無禮の事ですから深く注意を願ひます、序に食事に就ての「教歌」とて昔より書殘されたるもの多く御座ひます、今二三を、

一　汁はまづ、吸ふて實を喰ひ飯を喰ゑ、二度目の汁は實をさきにくゑ、

一　見苦しき、ものは大口白眼喰ひ、舌打したり音をさせたり、

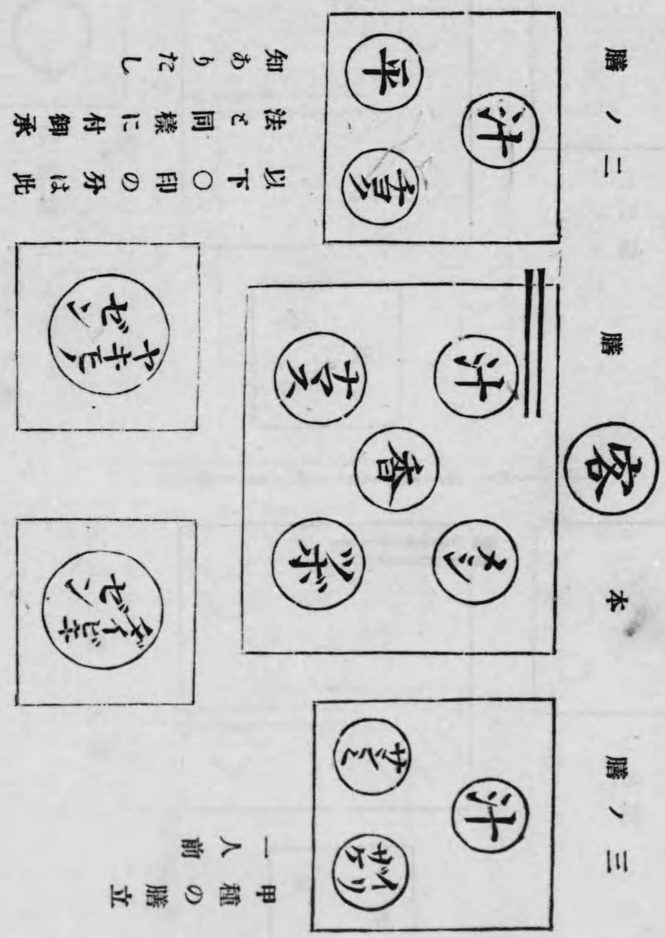
一　膳越しに、箸さし延べて物喰ふは、之より上の不行儀はなし、

一　鯛すゝき、鯉の子付や刺身類、猪口とりあげて、挾み喰ふべし、

◉本膳各種の膳立法

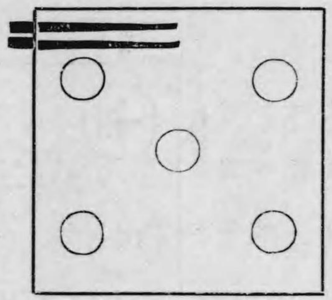
膳立法は流儀により種々異なるもので、殊に小笠原流に用ゆる「七五三、五五三」等の高盛になりますと、到底普通に出來るものでない現代の社交的儀式に應用すべき膳立として、左の圖を紹介致して置ますから斟酌してください、殊に時節との關係もあり料理の都合も御座ひますので、幾分の變化は已を得ざる次第、又主人の心次第――經濟上の關係もあれば、分限相應こそ適當でしょう、二三の膳は、本膳の箸立を一順して後食するものです、此時は混雜を免れぬものですから、一時に進め難き事もあります、其順序は「婚禮式」の段に御話し致し、茲に略致しますが客座の狹き處は接伴人より、口上を以て「實はそれ〴〵、粗末の品物なれど差上ぐる筈で御座ひましたけれど、何分手狹の處で却て御迷惑だと存じますから、失禮ながら略儀に致しまして後刻御屆申ますから不惡御承知を願ひます」と――席の中央に一人前を出して言葉があれば、必しも料理の品々を悉く併べる事はいるまい、最も、それは「贈物」となるやうな膳に限る事です、

傲者なれば、遜に遠かりて禮を忘れ、儉に過れば固陋に陷りて又禮を缺く、共に中庸を失ふものと知るべし、

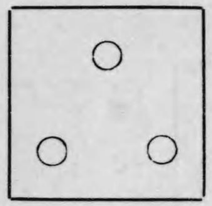


乙種の膳立

焼物膳一人前

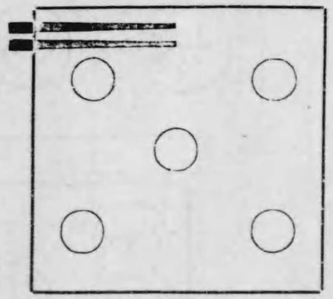


臺引膳

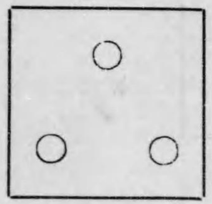


二の膳

丙種の膳一人前

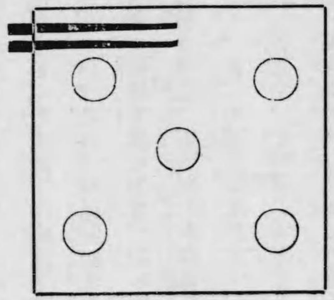


焼物膳

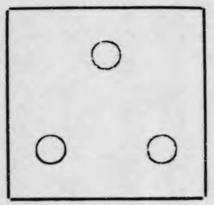


二の膳

丁種の膳立一人前

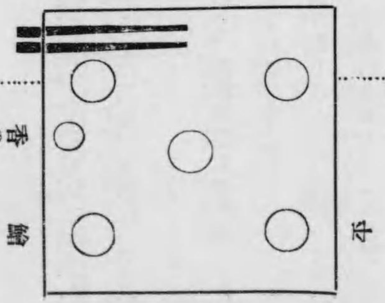


客



二の膳

此膳立を説明致してあります忌式の時は平と鱠が反對になります眞中にあります飯は坪です



◉三寶式

三寶は「熨斗」をのせ（熨斗には鶴の羽重、玉川、千代、たばね等があります其内の一種です）客の方る穴を向けて出します、是は婚禮の時に限ります通常即ち正月とか床飾りとか、又婚禮の時でも盃とか肴とかを戴せます時は、穴の方を手前に致します、

持方は小供ですと「眉毛高」に捧げますけれど、十六七にもなるお娘さん方は口より少し高い處だと思つてください、足取りは通常給仕をするやうに歩みません、ホントウは三足づゝ蹈むのですが二足にても静に行ば宜敷いです、初め接伴人より、

「三寶熨斗の儀、實は御一人様毎に差上る筈で御座ひましたけれど、何分時間も切迫致しましたから、甚、失禮で御座ひますが――略儀にて不惡御承知の程をお願ひ申します」

と挨拶を致し置ます、その詞がすみますと直に席の中央より、静に進み出でたる「三寶持」は、一應敷居の前に足を揃へ、陰之足より進みて蹈止まり陰之足より進み、中程に止まりまして左足より一歩引て蹈揃る、また一歩引て蹈揃へ左足を引くと同時に座し、三寶を置き少し進めて充分に三膝退き眞之禮を致します、客は自分／＼の方に當る穴の方る座を直し、先方が眞之禮をなすと同時に左手に右手を重ね、穴の高さに手を伸べまして頭を下て戴くのです、三寶持は膝を進ませ少し引寄せて高く捧げ、上座に大寄せを爲し下座に向き陰之足より蹈出し、敷居の所に止まること前と同じく静に／＼歸りゆきます、客は三寶をいたゞき終らば座に複します、本式にては一人〳〵に出し客より是を取上げ、給仕人に渡すのですが――花嫁に其三寶が出ました時、戴くのは無論花嫁ですけれども、取上げて給仕に渡しますのは女媒か嫁付女中の役です、花媒の時は男媒が其通にして渡します、以上の法式と反對に即ち穴の方が給仕人の方になり、閉合せの所を御客に向け――前に述ましたやうに、通常の時にする形でおのしが乗り、それが出てまいりましたなら給仕人が禮をすると、客も單に答禮する計かりですさすれば、給仕人が是を持ち歸るので御座ひます、

◉普通煎茶道具取扱方

茶は全体儀式的のものでなく、唐の陸羽とか盧同とか云ふ人は、山林幽寂の境に世塵を脱して心静に樂んで居たさうです、我國にも榮西禪師が樣を齎らして歸り又、明惠上人が移植をはかり各斯道に餘念がなかつたのは全く茶の德に感じ、修養上の一法となしたからで――今の所謂「點茶」のやうに儀式的に行つたのではない、それが今日では幾種も流派をなし各道具を奢るやうになつて、全く「茶經」の眞意――詞を換れば茶の目的たる「精神修養」――「品性涵養」等に遠ざかり、形式に流れて眞の本源を沒却するやうになつたのは殘念である、陸羽の「六美歌」に唱ふたゞツト氣韻の高ひ、世俗を脱した其妙味――それが即ち一道の光明となつて――其眞髄を發揮したのは盧同の

作で有名なる「七碗茶」で一碗毎に、風味を説いたことにても充分である、

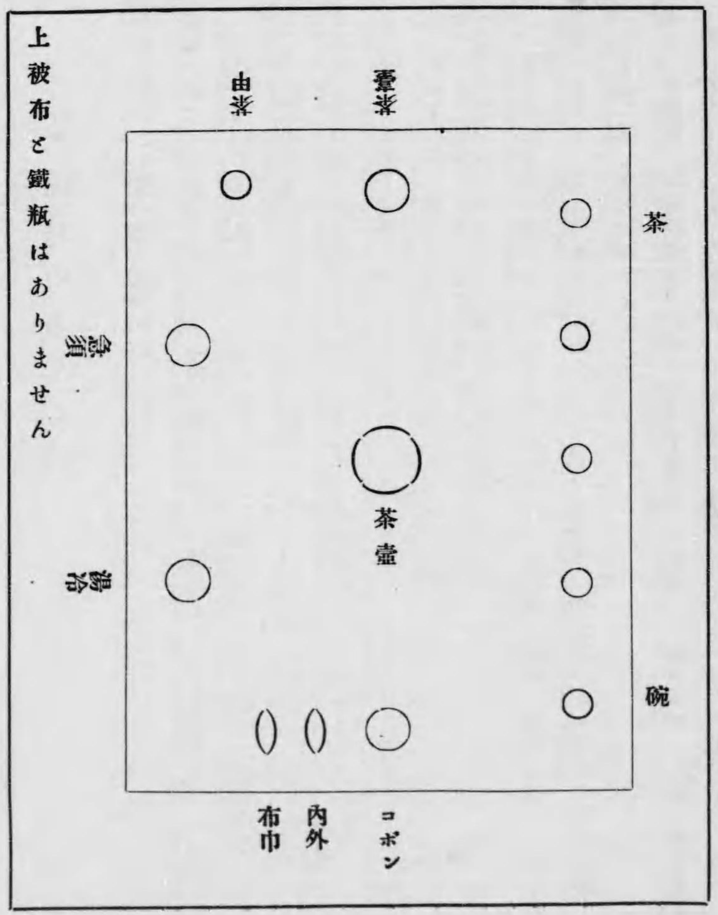
世の好茶家は初めより精神を爰に置いて、超俗的に研讃すべき事であらふさうでないと、儀式に餘儀なくせらるゝ間は茶の滋味を、共に談する價値がない共に談する價値なき者は――などゝ餘り氣焔を吐ひて見ても、物必す本末あり事必す始終ありで、初めより得て道の奥に入るものでなく、丁度禮法も其通初會から法を出ることは出來ない、法を出て如意自在の働をするには必す先つ法に入らねばならぬ、法に入るには法の形より研究すること、國民教育の第一歩として尋常一年に入學すると同樣――茶も亦道具の扱方より次第〳〵に進みゆかば、遂には達觀達道の極意に入りませう、

茲に述ます「煎茶」も、ホンノ初歩に止め普通社交上に應用する、拾貳通りの道具の取扱方を説ひたもので、式とか法とか別段名を付けるだけの者でないから、其積りで之を覺るをき他日專門的に研讃するの前提とすれば、蓋し得る處もあらんかと思ひます、

其拾貳通りの道具と云ふは、一に茶壺、二に茶杓（茶甲又はせんばい）、三に急須、四に湯冷、五に茶碗、六に茶臺、七に内外布巾、八にコボシ、九に茶盤、拾に上被布、拾壹に鐵瓶です、是を茶盤に羅列しやうは左の圖の通りですか、無論鐵瓶は火鉢にかゝり上被布は盤を掩ふてある所ですから圖中に見るません、

「蟹眼蟬鳴瓦鼎和、　白雲縷々碗中多、　閑居豈啻耽煎茗、　一片追思六奏歌」
「風竹雲松披素襟、　奇峰亂石趣幽深、　煎泉追想墨山事、　一片茶經千古心」

香堂



◉道具のあしらい

先づ道具あしらいより述べ後に順序を立てませう、

一、上被布――は火鉢のない方に手前の角を兩手に取り、膝の上に置き左膝の四角の一方を左に採り、それを右の手前の角を持居る所に合せますと三角になります、今度は右の膝のほとりになりたる、三角の角を右手に取り左手の角に合せますと、又三角が出來るのです右の手は三角の頭を持ち、左は左の端を持ちそれを併行するやうに兩膝の上に繰出しますと

こんな形になります、そこで左手に持ちし角の處を右に合せますと、丁度三角に三度たゝんだ物となります、右の手に持し處を右の帶に掛けるのです、今から是を三角に三度たゝんでと書きますから、左樣承知を願ひます、其上被布を引落す時は右手は膝に置たまゝ、左手にて下の方より引落し、帶に掛たる所が腹の中心に向くやう致します、それから後は上被布の擴がる通り左右の手は隨ひますと、もとの通りの四角になります、是を少し膝の下に引き手前の兩角を取り、火鉢のなき方に廻し茶盤を掩ひます、

一、急須――は丸柄と棒柄が多ひ、丸柄は右の中指を入れ拇指にて蓋を押る、人指と殘る貳本の指にて横に掛けます、若し中指が這入かねますなら人指にてもよろしい、棒柄の時は握りよきやうにして差閊ゑないのです、但拇指にて蓋を押ゆることは前と同じことです、

一、茶甲――は盤に伏せてありますから、其儘左手に取上げ右手を下より掛け、上向になるやう起します、伏せます時は矢張り左手は上を持ちながら、右手を下より狹み上向に手前の方より伏せ、右手を添ゑて盤に置きます、

一、湯冷――を起す時は、柄がありますなら右手に柄を持ち手前に起し、一應左手に載せ右手に柄を採り、左を添へて置きます伏せます時は、右手を仰向にして柄を握り前に傾け左手を添ゑて置くのです、柄がありません時は底の所を右手にて狹み、それを手前になし左手にのせ右手にて、上より兩縁を狹み左手を添へて置きます、是を伏せます時は右手にて兩縁を上より挾み、左手にのせ右手は仰向きにするが如くして、之を挾み手前に傾け左手を添ゑて盤に伏せます、

一、内外布巾――是は手前より一寸計り折り、向ふよりそれと向合になるやう又一寸計り折り、中筋の處を折重ね、又それを三折りにしたるものです、茶碗など拭ます時は始終二つに重りたる處を以て致します、是はどちらにでも折返すやうになつて居ますから、漏れたる時は返して使ひます、コボシの内ゑ絞りこみますと何度にても宜敷ひが、最後には洗ふべき物です、

◉鐵瓶の沸騰する順序

茶は第一に貯藏と――又水の質分により風味を異にするもので、好茶家の深く注意すべき處であらふ、假令茶に適したる水とても、一應沸騰したるものはいけない、必ず「生水」其儘を鐵瓶に入れ少々時間は立つとも、それを沸したるものが佳良で――古人は特に釜を掛け耳を澄して其沸騰する迄の順序を聽取し、非常に樂んだ「詩」とか「書籍」などがある、我國でも、賣茶翁高游外とか賴山陽とかも、確にこの趣味が深かつた人である、それで茶の風味を賞する人よりも――釜とか鐵瓶の側に寄り耳を澄して、首を傾くる人はホンノ眞味を會得し且又茶の――妙機を探り得たる人と解すべき者であらふ、今其沸騰の順序として古人が付したる名稱を紹介致します、

一、「蟬鳴」――と云ふて、是は梅雨正に霽んとする頃より蟬の音が、耳をつんさぐやうに聞ゑるのでせう、いろ〳〵蟬の種類もあるけれど一番に鳴くものは、俗にチイ〳〵蟬と云ふのです（松蟬とは違ひます）、この蟬は初めよりジーと高く鳴くものではない、必ずチチチーと云ふ樣な音からして、次第に高く長く鳴くのです鐵瓶も其通りで、湯がそろ〳〵沸き掛ますと丁度チチ〻と云ふ音が斷續して聞ゑます、さてこそ「蟬鳴」の名がつきましたでせう、

一、「松風、松濤、松籟」――と申します、皆同じ事で山の松風濱邊に寄する浪のごとく、鐵瓶の內で音するやうになりますから、それを取つて以上の名を付けたのでせう、

一、「蟹眼雪花」――次第〳〵に湯が沸きますと、鐵瓶の底より白き細き玉が上りきて湯面で、ぱつと散りますと煙見た湯氣が、縷々として起ります初めは丁度、蟹の目に似て又雪のやうにもありますから、蟹眼、雪花と云つたものでせう、

一、「魚眼」――是は魚の目玉の如きものが沸上り〳〵、油斷をすると蒸氣の力で蓋をも押上げ、湯氣は遠慮もなく口より吹出します、

以上四種の內「蟹眼」になりましたなら、直に「湯冷」に湯を注ぐのです、せめて「魚眼」の初めごろ――若其れ此度を過せば、茶に苦味を帶びるやうになりますから、水を加ゑて加減します、

◉順序

一、上被布を三角に三度たゝんで、右の帶に掛けます、

二、コボシを火鉢の後に取出し、客の見ゑざる處に置きます、

三、茶盤を押進めます、それは「急須」と「湯冷」が膝の前に併べ置くだけの餘地を取る爲です、

四、急須の全体が左向斜になるやう、左膝の前に取出します、

五、湯冷を急須と併べ、其間約一寸位ひの距離を取り、右膝の方ゑ左向斜に取り出します、

六、上被布を三角になし左手に之を採り、一應爪立ち火鉢の方ゑ膝を寄せ、鐵瓶の「つる」を右手に持ち左手の上被布にて蓋を押ゑ、正面に膝を直して湯冷に注ぎます、其鐵瓶を掛る時は上被布にて必ず出口を拭きますことです、

七、上被布の濡れたる處を外になるやう、右に廻して帶に挾みます、

八、左手を疊につき、右手に急須の蓋を取り盤の前縁に向より枕をさせます、若し急須の口の處が蓋を戴せても落ざるものは、柄と縁とに橋を掛けるやうにしてのせても宜敷ひ、

九、湯冷の湯を急須に移し、少し殘りたる「ヲリ」の處はこぼしにすため、外布巾を取り出口を拭ます――何品の出口でも湯又は茶を出したあとは、必ず内外布巾の内で拭きますから左様御承知ください、一度〳〵に書きませんから……

十、急須の蓋をなし、上被布を取り又鐵瓶の湯を「冷」に入れます、

十一、茶臺を取り左側る併べ、茶碗を左の方より取りそれに乗せます、

十二、急須の湯を茶碗に配當し、一滴も殘らぬやう移入れます、

十三、茶壺を採り錫なれば一應左側に置き、左手は疊に小指の處がつくやうにして下の處を握り、右手に蓋を拔ぎそれを盤の眞中に措き、中蓋あれは靜に取りて其上に重ね、壺を左右に持ち右膝の脇に直します、錫でないものは左手に持ちたるまゝ、右にて蓋を取り盤の上に置きますこと前と同樣――右膝に移すことも同じ法です、

十四、左手を着き右手に急須の蓋を取り、前の如く枕をさせます、

十五、左手に茶甲を採り右手と共に之を起し、左手に委ね右手にて茶壺を取り、茶の葉を移し茶壺を置き茶甲に右手を添る、急須に入れ茶甲は之を伏せ盤に置ます、

十六、茶壺の蓋をなし盤の直中に置きます、

十七、湯が冷めて居ない時は、急須の蓋をなし「コボシ」を右膝の處に寄せ、茶碗を手前の方より取上げ二三度廻して、こぼしに移し入れます、

十八、右の如くして茶碗を濯ましたならば、こぼしを本の處に直し急須の蓋を取り前の如く致ます

十九、湯冷の湯が、もう冷めて居ますから急須に入れ、ヲリの處は前の如くこぼしにすためます、

二十、直に急須の蓋をなし、二三度靜に「の」の字の形に廻して置き、又湯を「冷」に入れて置ます

二十一、急須を丈夫に持ち手前の茶碗に少し試み、適度と見れば左の如く注ぎ分けます、

12 9 2 ○　14 8 3 ○

15 6 5 ○

11 10 1 ○　13 7 4 ○

上圖は茶臺に碗をのせたる模樣を示したる者で數字は茶碗に茶を移す一しきりを指したものです、一個の茶碗に三しきりづゝ注ぎますから、拾五になります、

二十二、右の如く注分たる茶碗を客に出します――湯が冷て居ない時は右の順序によりますが、若し湯がさめてをりますなら（十七番目）直に急須に入れ手數をすまして之を注ぎます、

松窓啜茗對殘暉、　煙影欲無香滿衣、　了得先生一煎法、　禪家清味愜其機、　香堂

◉跡仕舞

一、客飲終りますと伏せますから、之を引下げ來り盤の左側に併べます
二、急須は一番に盤にのせ、それから湯冷の湯を茶碗に配當します、
三、湯冷を内布巾にて拭き前の如く盤に伏せ、コボシを取出し茶碗を濯ぎ内布巾にて拭きたる上、
　前の如く併べ伏せます、
四、茶臺も之を、外布巾にて拭き伏せますが、金類のものなら五枚重ねに左手にのせても大丈夫ですけれども、木の臺は一枚〳〵に仕事をなさいませんと、過ちが出來ます、
五、都合よく茶盤の整理をなし、コボシを戴せ最後に帶に掛けたる、上被布を取り擴がるに任せ手前の兩端を右左の手にて持ち、盤の全体を掩ひかぶせます、
右火鉢の時は只今の通りですが――左に火鉢があります際は、茶碗、茶臺を右に置き茶を注ぐ時も右の端より初め都合拾五度にするのは、右の時と同じく上被布を冠せる時に右の方より致します、
煎茶の方法は幾種もあります、然し風味の要は「清甘苦」の調和にありますので研究を願ひます、

◉茶の客席

客が四名か五名か御座ひました時に、前の通りの道具を揃ゑ主人自ら菓子器を上客に出し、何卒順次にお廻しくだされたしと挨拶し、煎茶に掛るか又子女に運ばせ其通りにするか、何れにしても宜敷ふ御座ひます客が菓子を取ります時は既に煎茶の道具にかゝつて居ます、
菓子器は臺に載せ、蓋あれば「の」の字の形に取り、臺に置かれるものなら左の方ゑ置き角の物なら下に敷き器をのせ、客の方ゑ廻して差上ます、客は順次に之を取るのですが若し箸でもついて、ありますなら是を頂き臺にをき、懐紙を出し左手に持ち右手に箸を取り菓子を取るのです、茶も一度正式に出し二度目は、盆に急須と湯冷と外布巾をのせ、前の如く順次に廻すのです客も茶を注ぐ時は、三仕切にして必ず急須の口を外布巾にて拭く事です、次から次ゑ廻す内急須の茶が盡きましたならば、湯冷の湯を急須に移し二三度のの字形に廻した上に差上ます、最後に茶碗を伏せそれを主人の側に引來り、跡仕舞をなすことは前に述た通りです、

◉かけ捌及羽織の着せ方

當今は「かけ」も餘り用ゐませんやうになりましたけれど、時に或は其必用を感ずる事も御座ひます、今是を着流し其捌方の概要を述ませう、
右に向んとする時は右足にて捌き左の方へ掛を引寄ます、左に向んとする時は左足にて裾捌きをな

し右の方る引寄せるのです、着座せんとする時は下座の足にて後に靜に捌き、一方を又上座の足にて捌きましたなら「小褄」を取り着座致します、小褄を取ると云ふことは襟下五六寸の處を右手に取り、左手にて裾を握り左の膝と右の膝の下に敷たる重着が行儀よく見るやうになしたるものです、「かけ」の襟下を兩手に持ち膝の兩側に引寄せる事は羽織と同樣で御座ひます、羽織の着せ方は、右の袖口に右の小指を入れ左の袖口に左の小指を入れ、左右の手にて左右の乳を持ち、右手の人指ど拇指にて脊筋の處を握り、それを着物の脊筋に合せ右手は脊筋に着けながら、左の手の處を本人の右手に渡します、今度は左手にて脊筋を押る又右の方を取次ます、以上は男子に對する着せ方ですが女子は其反對で、右より先に渡す迄です、

◉ 袴の捌方

袴を着し正座して居る際は、手を八字形に置て内には入れません、今立んとする時は爪立て羽織を捌き、左右の手を入れ「大寄」を致します、大寄と云ふは前にも説明せし如く向く方の正面になる迄、膝を寄することで左とすれば左膝を少し離れさせ、それに右膝を着けます是にて左向正面にならぬ時は立上る際、加減をすればよろしゆう御座ひます、玆に女子の分と同じく「陰之膝」から必ず立上るのです、「小寄」と云ふは、左向き斜になつて陰之膝より立つのです

前に一寸書ひて置ました「普通之立方」是が大底應用がきくのです、それは膝の上にある左右の手を袴の内に入れ、其儘爪立ち右膝より立てます時右手にて少し袴を上ぐるやうに致します、大寄でも小寄でも陰之膝より立上る際は、必ず陰之膝に當る手にて足元を捌き、右手には右膝を立つと同時に袴を折込むやうに小腰にて立ち、向し方面で羽織袴を繕ひたる上客の正面に向く事です、着座せんとする時は、袴の内へ兩手を入れ左にて袴を後に少し引くと同時に左の膝をつけ、右も其通りにして膝をつけましたならば、羽織を捌き襟を引寄せ袴の皺を正しくなし八字形に手を置き、容儀を整るます是は習熟を致しませんと、圭角を現はすやうでは面白く御座ひません、

◉ 料紙硯箱の進方

料紙硯箱を進むるには一に硯二に筆三に墨四に水入、五に糊皿（青葉に飯粒をのせてもよし）六に小刀を揃る、蓋の上には料紙及書簡袋をのせ兩手に持行き禮をなし、蓋を「の」の字に取りて右に置き、硯に水を入れて墨を磨り是ものの字の形にするがよろしい、筆を浸して向縁に掛け二つとも兩手にて廻し、硯を客の右に料紙を左にして進めます、筆をかむことは絶對に禁じます、

恭くして禮なければ勞ること多く、愼て禮なければ懼入りたるが如く、若し勇のみにて禮なければ其容を亂すべく、禮を以て程よくせざれば、此弊を救ひ難し

◉婚禮

禮式の書籍は色々ありまして、殊に婚禮式に關する說も亦多く御座ひます、然し實用に適するものは容易にない、それに現代の儀式は古流の敎方と大に趣を異にするの已を得ざる譯で——時間と經濟と勞力より受る偉大なる力——其力より支配されつゝある現代の禮式なるものは、一も二もなく略式と云ふ口實の下に排斥され、酷しきに至りては此人生の大禮を有乎無乎の裡に、葬り去んとする傾向がありますので歎すべき次第です、其僻飲食とか衣服に就ては惜げもなく費を尽し、婚禮は飲食と衣服の着飾りに始りまた終るものゝやうに思つて居る人がある、著者が拾有餘年間東奔西走斯道の擴張を目的として、各地の人情風俗習慣等を視察したる結果、摸範として他に推奬すべき好資料が何程ありしかと思ふ、實に寂々寥々曉天の星も只ならざる程である、世が如何程進歩し人が如何程競爭に日も足らざる勢ひとは云ふ、現在兩親の同意と親戚の承認を得たる婚禮——然も本人と本人が互に覺悟を極め、百年同棲其苦樂を契ると云ふこの大禮に於て、飲食と衣類に重きを置き結婚の意眞ををろそかにし——結婚の式を等閑に附するは聞ふざるも亦酷しき極みではあるまいか、假令九尺二間の長屋住居でも、一家の戸主相當の權利を持つものが、床柱の眞前で天下晴れての式でこそあれ、分限相應に事を擧ぐるもの誰に遠慮も無ひ筈です、

今茲には其式と云ふ事を順序立て、參考に供するのだから諸子は其心して讀んでください、さて愈々媒人より吉日を選び兩家の承諾を得れば其準備に忙殺され、イヤハヤ兩家とも目を廻すばかり、今晩は遲くとも七八時頃迄には「中宿」たる、嫁方一同の休息所に着くべき約なので萬事の用意落もなく、殊に嫁の身仕度など深くも注意すべき事であらふ、

◉嫁の身ごしらゑ

嫁の身仕度は中宿にて致す事が多ひ、それは婿君の宅が遠方なので途中いろ〳〵亂もせんかとの、心配より出でたる事なればあながち咎め立てする必用もないが、全体兩親初め兄弟姉妹等列座の上に「門出祝」と云ふ式あれば、其前既に用意のあるべきものである、花嫁の身ごしらゑ——それは頭の頂きより足の爪先まで、嫁付女中が第一の役なれば多少氣に入らぬことありとも、口返事など嗜むべき事である古來此夜の衣服に就て定めあるものは「下に白上に色小袖其上に白無垢を纏ふ」と云ふ事になつて居る、それに「綿帽子」を冠るのは近世に初まり、昔は「被」と定まつて居たさうである、然し衣服に關したる事は身分相當の物を用ゐて頂きたい、

禮は敬恭辭讓を本となし、節文度數の式あるものにて、以て行爲を規矩とするが故に、此に因るときは能く、卓然として凌辱を免かるべきなり

◉門出の祝

右の如く準備もすみ、いよ〳〵出立と云ふ間際に「門出祝」とて、酌交す名殘の盃事がある、住馴し我家ながら何となく心も改まり、先つ父母の盃を頂戴し兄弟姉妹にも心能く別れの盃をなし、再親のまごころより現れ來る訓悔は今更ながら胸にしみ、早時刻到來イザ御出立と云ふ媒介人の聲を聞にも何となく悲の涙が衿に傳はり、門出に不吉と云れんも怯むに似てよろしからず、さりとて嬉しさの胸を包みかねてそわ〳〵と落付ざるも、心淺間敷者と思はるれば是又大なる恥なれば茲こそ嫁御寮の注意あるべき處です、

◉嫁方案内の件

以上の如く門出の盃事も終りまして一同出立「中宿」に休息（此間を利し嫁は裝束してもよし）、茶菓の饗應を受け媒介人は猶念の爲め、諸種の交渉を重ね置くのが宜敷いさて先刻より御入來被下度旨の、案内も待ち居事なれば直に出立致します、

若茲に婿方に於て客間狹く、充分客を入れられざる時は初めより交渉して「三々九度」に、關係

ある人々のみを案内する事です、即花嫁と媒介夫婦と見屆人に止め、他の客一同は中宿に其儘して茶菓などを出し、心利きたる人に給仕を伴はせ接伴がてらに四方山の話――塡合によりては酒肴をも差上げ時を移す其内に、三々九度も嫁と舅姑の見參も無事すみますから、改めて本客一統を案内するやうにすれば假令、客間が狹からうとも事は大にはかどります、乍去、婿の宅が客間も充分で何の不自由をも感せないとすれば、同時にお伴して一應茶菓など前に述たる如く出し、嫁媒介等を式の間に案内すればよろしい、何分今晩は如何なる大家と雖混雜を免れざるから、休息中のお客に對し間抜の事などないやうに特に注意が肝要々々、序に申して置が地方により酒肴を先に出し、客を取持つ事を本体として三々九度の杯ごとは、部屋の内にて始末を付他の客一同は之を知らさる程、酔潰れ前後不覺となるなんて――無作法千萬ではあるまいか、

◉婿方の出迎及嫁方の着席

嫁方一同の影が闇にチラホラ提燈の火に認められ、ハヤお出の聲もそこ〳〵に響く頃は、婿方の連中出迎として、羽織袴も仰々しく整列をなし遠路お御苦勞に存ずる旨の挨拶も、簡單に交換し嫁方一統を本屋に導きます、茲に花嫁及付仕の女中は勝手口より入り、他の客は玄關より昇るものです此時地方の習慣として嫁に「釜蓋」を、冠せる事がある無論禮法にはそんなことがあらう筈がな

い然し案ずるに、嫁となり此家に輿入りする以上は追々臺所の主任者となるものなれば、一番にこの觀念を頭に入れ嫁も亦始終忘れないやう、こんなことをするのでせう別段嫁の器量を下げる程の事でないから、釜蓋とかを冠ぶりても差閊るはあるまいと思ふ如何にや、其外今晩の儀式に關し全國に就き、俗習など調べましたなら諸種の滑稽もあるのでせう、

嫁は待女郎に導かれ、兩親初め親戚の着席して居る其間にと、蓮歩靜に運びますれば「接伴人」は直に一應の挨拶を致します、それがすんで本座の方を案内し接伴人より媒に向ひ、「座配の儀はよろしくお願ひ致します」と依頼すれば、媒は定の如く指圖して一同着席致します、

嫁の兩親は左右に分れて着座してもよし本床には圖解を以て示したやうに嶋臺其他の飾りがあります、

接伴人は席を定めず臨機に着座するのです、然し後段の場には一定します、男子の末席がよろしい詞を述べます時は、嫁の父と向合ひ敷居の先に座ります

八疊の座敷にて本客が多いときは、向ふ正面に四人坐ります又媒介人が婿嫁の兩家より、身分が高き時などは初めより兩親の側に着坐致します、而して「介添役」の夫婦を下坐に据ゑるのです、今流行する「出合婚禮」――成程便利なものですが、「三々九度」だけは是非自宅の床の前にて執行し、宴會だけを料理屋に依頼するのは宜敷ひが、三々九度迄もすると云ふ事は考ゆる餘地がありませう、然し是も相互の交渉により成立ものだから、絶對に否認する譯にもゆかない世の推移は如何になるか不明である、時代の要求だと思ゑば何の事もないそれだから、茲に概略述て置く必用がある、抑出合婚禮と云ふことは婿方を主人とせねばならぬ、左すれば上坐の方ゑ嫁方を着坐させ婿方は並びて向合ひ――父と父と云ふことになります、是とても三々九度だけは本膳前に式をあげるがよろしい、其後は大底左に「自宅婚禮」を述ますから參酌してください、

◉最初の儀式

前の如く着席致しますと、接伴人も男媒と接近して坐り――諸種の交渉上便宜もあれば且又給仕人に指圖し易ひ處に居るのです、第一に「茶」を出します接伴人は末席より「粗茶おあがりください」と」、一應禮をなし手は着ひたまゝ口上を述ます、すると嫁の父より茶臺を引初め一同之に從ひ膝側に寄せるのです、女媒は嫁に向ひお茶お取りあそばせと私語き――何でも嫁より先に手を

出さぬ事に致します、此際「菓子」を出します然し時間の都合では「本膳」後にしてもよろしい、此樣に時間も差迫りて居るから、茶も一碗限りで是を伏せ給仕の出した處に置くのです「落付茶」と云ふのでせう、客が茶を飲んで居際に「煙草盆」を出します、火鉢は客の着座前に出し置くのが宜敷く子供などに抱ゑさすのは危險です、かくて煙草盆も引きますのですが「男媒人」は、嫁の父の方へ向き花婿を伴ひ來る旨の口上を述此席を立ちます、

◉婿君の着座及三寶式

男媒介人に連れられたる花婿は、一應下座に着席し一禮を致します、媒より直に彼方ゑと知せますから、設けの席につき「三指禮」をなし扣ゑますが、もし花婿たる事を紹介でもする時は無論媒も初めなり、伴ひくるべき詞もなく何ぞ用事でもあるものにやと、一座の客が思ふ時に限るもので初より、其口上を述べて立行き婿を伴ひ來りし際は只今の通りで宜敷ひ、接伴人は恭しく、

「三寶のしの儀、實は御一人樣毎に差上る筈で御座ひましたけれど、何分時間も切迫致して居りますから、略儀にて何卒不惡御承知くださいますやう、御願ひ申ます」、

と口上を述ます、すると三寶の給仕は鶴の羽重か玉川熨斗かを載せ、前に說明しました通り靜に席の中央に持出で禮をなしますと、客も心得の通り之をいたゞきます給仕が退りますと茲に

◉親と親との挨拶

婿の父は外戚の兄弟より一人を伴ひ、席の下坐正面に坐し一禮致しますと、媒介人より紹介があります、其時婿の父は、

「この節は御無理に御相談致しました處、首尾よく御聽入くださいまして、私初め親戚一同かたじけなき次第で御座ひます」と一禮し引續き少し詞も高く「殊に御出の上にそれ〴〵御土產物迄頂戴致しまして、御禮の申やうも御座ひません」と、

「御見受の通り、萬事不行屆の家で御座ひますから――今後とても何分よろしく願ひます」

と挨拶を致しますすると、嫁の父母は其坐を立ち婿の父と向合ひ一禮をなし、

「不束なる娘を、御詞に甘ゑて差上ましたけれど、何の敎育も致して居りませんから――御內の御家風に應しどうぞ、御育て直しの程願ひます」と、

一禮をなし猶引續き「結納の贈物につきましては、御念入の品物を頂戴致しましてありがたき仕合で御座ひます」と口上が終りますので母親は、

「我儘育ちの娘で御座ひますから――何分よろしく御願ひ致します」

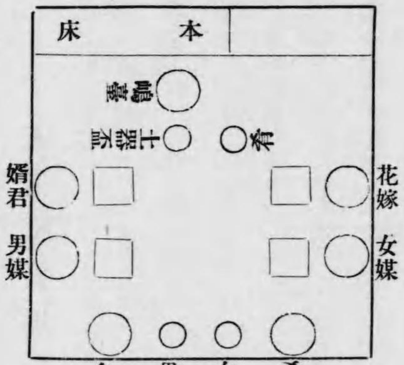
と詞短く意味深き挨拶を致すのです、次に婿の母及叔母が伯母を伴ひ只今の處に着席一禮しまして媒介人より紹介があり、前の如き旨意の下に挨拶をなすと嫁の両親も亦是に對し答禮を致すこと、申迄も御座ひません別に親戚の挨拶は酒席の上にてもよろしい、詞を述る時はいつも手をつき頭を上げ、向ふ三尺の處を見て話をなさいます、さてイヨ〳〵相方の挨拶が終りますと接伴人は、

「儀式の盃を初めとう御座ひますから――暫く別間に御休息を願ひます、誰樣か御見屆の爲め御一名お殘りくださるやうに――……」

と詞を述べますと客一同は、接伴人に連られて別間ゑと立退きます、殘るは「花婿」「花嫁」「媒介夫婦」「見屆役」で御座ひます、此時多く嫁を「納戸」に連行盃ごとをさせる習慣がありまし、それは非禮です、若し客を立たするのが氣の毒なら初めに述た通り、一統の客は案内せすに於てまつ三々九度より初め式が終りてから、伴ひ來ることにすれは別段氣の毒と云ふこともあるまい、其邊は交渉を重ぬる時充分に研究の餘地もある事ですから、媒と打合せますのが都合がよろしい、

◉三々九度の座配及床飾の事

坐を立ちし容の跡直に床に飾りし「兩蝶」は勝手に持行き「島臺」と「三寶」二つを左の圖の如く取出します、嶋臺は高砂の「翁媼」を主とし、それに「松竹梅」と「鶴龜」をあしらい、千秋萬歳を意味したもので目出度事の極みです、嶋臺の足は三本に限ります四足のものは不吉です「土器盃とあるはカワラケ」の三枚重ねです、此時の三寶は穴の方を正面に向けて置きます「肴」とあるは三寶にのせたるもので、「昆布」するめ、榧の實、勝栗、ごまめ」の五種です然し昆布するめ鹽位ひでよろしゆふ御座ります、座配の圖は左の通りです



口印の四つあるは本膳で即ち「具雜煮」です、向皿に「數の子かつを」を添ゑてあります、

向ふ右が本床でありますなら、それが反對になりますだけです、

見屆人は婿の上に着座し矢張り具雜煮の膳を出します、

具雜煮が出揃ひますと接伴人より例の如く口上かあります、すると女媒は我椀を脇によせ嫁の椀を取り、嫁の箸にて食し易きやう何くれとなく心を添ゑ蓋をして膳に返すのです、其間一同は待合

せ其手數がすみましたなら箸をいたゞき形の如く取上げて食します、花嫁が食し終る迄は箸でも椀でも先に措ないやう心掛くることです、

◉男蝶女蝶の舞初め

一同が箸を措き具雑煮の蓋を致しますと、兩蝶が高く銚子を捧げ圖の如く着座の上一禮致します、其銚子の置方は、男蝶は嫁の方ゑ斜に女蝶は婿の方ゑ斜にして置くのです、

茲に「舞初」として兩蝶共高膝にして立上り、男蝶は女蝶の前を通り女蝶あとにつき、三度廻りて元の座に正面し直に高膝をなし、男蝶より女蝶の口に一度合せますと、女蝶蓋を取り差出すので銚子の内ゑ酒を三度移し入れます、女蝶は蓋をなしますとすぐに正面し其儘立上り、此度は女蝶より男蝶の前を通り男蝶後に着き二度舞をなします、然して前の如く高膝をして今度は女蝶より男蝶ゑ口を一度合せますと、男蝶蓋を取りますからそれゑ二度女蝶の酒を移します、是にて舞初の式が終りますから兩蝶一禮を致します、一寸御注意を致し置ますが若し右が本床で男蝶も右に座し、左が小床で女蝶も左に座し、舞初の式を擧げます時はどちらも前を通らず、直接男蝶は婿の方ゑ廻り二度目の女蝶も嫁の方ゑゆきますので、一段と舞安くなる譯です、銚子を持つ時は右手につる左は拇指にて蓋を押ゑ、指先の散らぬやう高く捧げます、

◉三三九度の式

形の如く男蝶女蝶の舞始が終りますと、介添及肴押の兩役が出で來り、圖の如く着座して禮をなし介添役は、直に嶋臺の前に進み眞之略禮をして、土器盃をのせある三寶を持ち婿と男媒介との膳の間に置き、禮をなして席に着きます男媒介は第一番の盃を取り、右手にのせ左手を添ゑ婿に差出しますと、婿は是を右手に持り左手に移し右手を添ゑ、女蝶の前に差出します女蝶は角の立ぬやう丸く歩み、爪立ちたるまゝ婿の盃ゑ三切り注ぎ、上坐に膝を廻して席につきます、

此時肴押は立出で、嶋臺に飾付たる紙に載せある肴――其肴を婿の膳にのせ輕く禮をなし、また嶋臺の前に進み今一つの肴のそれを嫁の膳に置くのです、初度の肴はこれにて濟みますから我席に歸ります、婿は注でもらつた盃を飲乾し右の拇指にて飲口を拭き媒介人に渡します、媒人は之を受取三寶にのせますと、介添はそれを嫁と女媒介人との膳の間に進め一禮の上退ります、女媒介人は男媒人のなせし如く嫁に渡します、嫁は是を右手に採り左手に移し頭を下げ、男蝶の前に差出します男蝶は角の立ぬやう、嫁の前に進み其盃に三切り注ぎ上座に膝を廻して歸ります、嫁は之を飲み懐紙にて拭き女媒に渡します、女媒は三寶に載せ介添は又婿の處に持行きます、前の如く女蝶より注ぎ婿より男媒に渡しますと第一番の盃はすみます、そこで男媒介は其盃を中になし第二番の

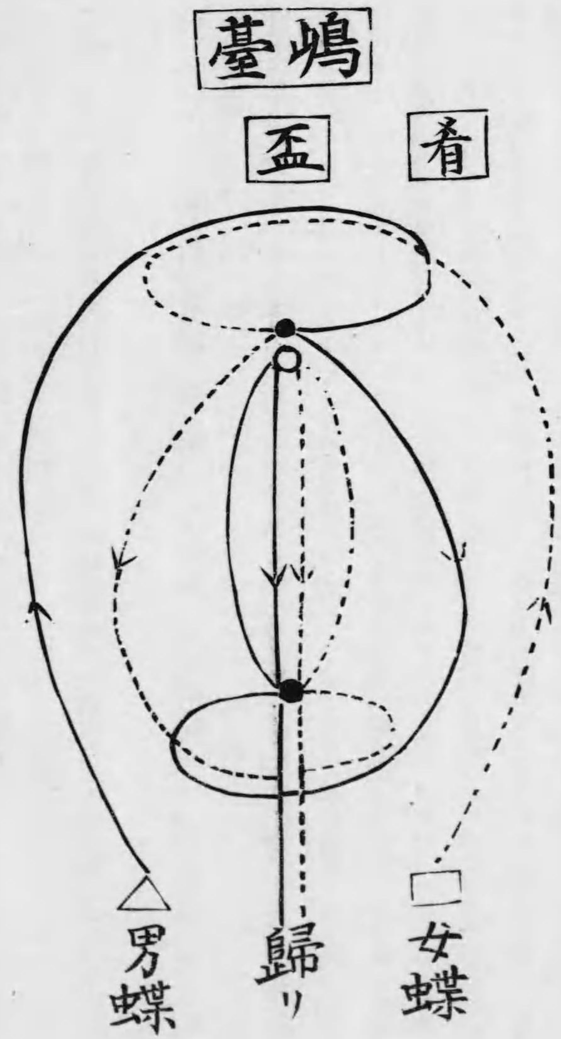
上に重ね、介添に渡しますと介添は之を嫁の處に持行き、以前と同じく嫁飲て媒介に渡します、此時肴押は三寶にのせある肴――その三寶を捧げて嫁の處にゆき、先つ箸を頂き肴をはさみてせんに渡し置たる肴――その肴ののせある紙に置ます、かやうにして肴押は三寶を持ち婿の處ゑ移ります時は早既に、婿は嫁の盃を女蝶より注せて媒に渡し、女蝶も我席ゑ歸りかけて居る際ですから、茲一寸注意をしませんと間抜の立往生となりますから、敏捷の働きを用する所ですかくて肴押は、婿の前に進み嫁に致したる如くにして肴を押ゑます、

男媒は婿より渡されたる嫁の杯を例の如く介添に渡します、介添は是を嫁の處に持行きますと、女媒より嫁にわたし男蝶それに酌をなします、かくして第二番の盃は終りを告げましたから、女媒は第三番の盃を取り、中になしたる盃の上に重ね直しそれを介添に渡すのです、この盃が婿より飲み嫁にゆき婿にて納ります、肴押も此度は婿より先に進めそれを嫁の處に持行き押ゑましたら、嶋臺の前右手の方ゑ飾付て席に退ります、介添も婿にて納まりたる土器盃の三寶を、嶋臺の前に持行き盃を本の如く「重ね直し」て眞の禮を致しますから一同も頭を下げるのです、若、男媒が盃の重ね直しをして介添に渡すことでしたら、只其儘持行き禮を致す事です、介添人と肴押の兩役は此時一禮をして勝手に退ります、「謠」は三番曲で――婿が一番の盃を初むる時に一ッ、嫁が二番の盃を初むる時に一ッ、婿が三番の盃を初むる時に一ッ謠ひます、全体禮式には御座ひません然し近來は是非入れるやうになつて居りますから、其順序だけを書ひて置きます

介添及肴押が勝手に引退りますと、女媒は嫁と向合ひ「綿帽子」を左右の手にて取り、膝の上にて右より折り又左より折りて之を合せ、右より重ね折りして給仕人に渡します、給仕人は盆を持來り之を受け二膝退りて恭しく頂きます、此時花嫁及女媒人も三指にて答禮するのです、給仕は勝手に退り新夫新婦及男媒婦媒共に膳を左右に開き、兩蝶も同時に一禮し膳をもとの如く直します、

◉兩蝶の舞結

兩蝶は直に銚子を高く捧げ高膝にて正面にむいたまゝ立上り、茲に「舞結」の式を致します其舞結と云ふは、左に圖を以て示しますが――始終男蝶は外を繞り女蝶と上座下座に出合ひます時も女蝶が内側ですから――最初嶋臺の前にて出逢ひ、男蝶より靜に口を三度合せます即ち、圖中●点のあるのは男蝶より口を合せて居る處です、今度は女蝶が婿の座せし方を繞り男蝶が嫁の座せし前を繞りて、下座に出逢ひ女蝶より男蝶に口を三度合せます即ち○點はそれを示したものです、それから今度は兩蝶肩を合せ島臺の前迄併行し、左右に開き男蝶より口を合せ又併行のなり勝手に退ります八疊の坐でも、出來ますから練習して御覽なさい然し、略にする時は舞結も致しません給仕が綿帽子を引去り、一同禮をいたした後ち兩蝶も歸ります、かくて婿は男媒に連られ此席を立ち嫁も其あとに、女媒が伴ひて休息の間に引退り三々九度の式は無事に芽出度茲に終りを告げました、



◉嫁と舅、姑との見參

女媒介人より連られ行きたる花嫁は暫く息みましたなら、婿の兩親と「見參式」を擧げます、古流にては此時手掛を出し、三組盃にて行ひ引渡しを三人の前に据ゆるのですが、今は略式にして三組と三寶にのせたる、スルメ、昆布、花卷鰹、でよろしい先一番に父飲嫁受父に献じます、二番の盃は母飲嫁受母に献じます、第三の盃は嫁飲み――序に兄弟姉妹る廻します、兄とか姉とかの盃は嫁が頂戴するのですが――此種の盃事はなるべく略式に運ばせたいから、兄弟姉妹の盃などは必ず其時でないとも折りを見て初める事もあります、初め父飲み嫁に渡す時「詞」があります、嫁は頭を下げ手をつけ口の内にて、ハイ〳〵と返辭するのみにて宜敷く、古來定りたる詞とてある事なし只簡單に要領を得たる事を申します、別に此時の盃を媒介人が飲納める事があります、強ち惡きことでない然し返すとか返さぬとかと理をつけて、盃事迄にも及ぼすは可笑き事ですから、そんな事は頓着なしに決行なさつて差閊へ御坐ひません、若婿の兩親が亡くなりてある時は位牌の前で「禮拜合掌」することです

「禮は敬和の表情たる事を忘る可らず、起居動作は譬ば体操の如し、意と形と一致せざれば虚禮となりて演藝に終るべし、敬和の表情は必しも技術の巧拙を問はざるなり」（香堂）

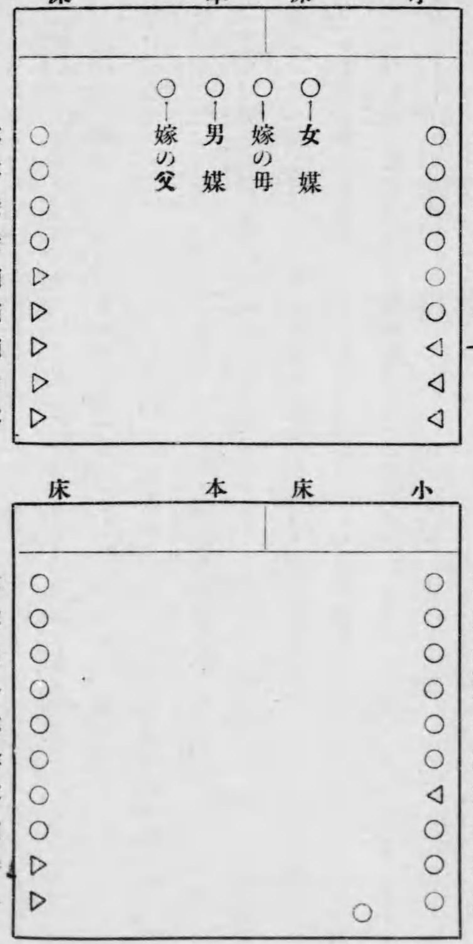
◉本客の着席

見參の式が終りますと嫁は休息中に衣類を換ます、之を「色直」と申し古流では別に嚴として式があります、只今は略致し早く身仕度を整るますのです、本座の方は既に別間に休ませたる嫁方一同に向ひ、接伴人より左の意味ある口上を以て案内致してあります、

「御陰樣にて儀式の盃も――幾千代久しく取結が濟ましたから、聊か祝の印として粗末なる品々献上致したう御座ひますから、以前の間ゑ御出席を願ひます」

其案内に連れ本座に着席致します、本座は三々九度の式終ると共に嶋臺など床に飾り直し、客の御出前から「座蒲團」を敷きつめてあります、座蒲團は三々九度の式がすまぬ間は出しません、着座に就て二種圖を以て御示し申すから、都合を見てなさることです萬事媒と協議するのがよい、

第一圖の着席は處により、婿方は同座せず宴會に移りましてから接伴がてらに出席します、然し此座配により婿方も同座しますなら、男女左右に分れて嫁方に次ぎ着座するのです、如斯、圖を記しますけれども內戚外戚の關係又は縁はさう近くもないが、親類中の上輩とか年長とかを下坐の方へも坐はらせられぬ情義もあります、實際に於て困難を感することの少からざることを承知して居ますから、多少の變更は已を得ざる譯です、



◉本膳二の膳の進方並親々の盃

右の如く着座致しますと「本膳」を正面に「二の膳」を客の右に出し、接伴人より口上を承り一同一順の箸立を致します、此時「三組盃」を出し嫁の両親と婿の両親とが、盃の取交しがありますそれは婿の両親が、嫁の両親の前に進み出でよろしく詞ありて、嫁の父第一の盃を飲み婿の父之を受け又嫁の父る献じます、一方は第二の盃を嫁の母飲み婿の母之を受けそれを嫁の母る献じます、是にて婿の父より詞ありて後席を換ります、即ち婿の母は嫁の父と向合ひ婿の父は嫁の母と向合になります、第三の盃を嫁の父飲みそれを婿の母頂戴して嫁の父へ献じます、第一の盃は婿の父より飲み嫁の母へ渡します、この時一献宛加るて献酬する事もあります、それも宜敷く御座ひます銚子は二ツ共蝶の飾りを取除き、蓋も換るますがよろしゆう御坐ひますが、蝶の飾をとれば換ぬでもよろしい、古流では三々九度を長柄にてしこんな時に用いますのは「提」です、肴もそれ〳〵定りが御坐ひますけれど數が多くて長くもなりますので、今迄用ゐた三寶のものにて差閊へありません、茲に或地方の習慣を御紹介致しませう、それは嫁の父より婿の父るヤリキリと云ふて一度さしたのみで、それを返さず婿の母るも嫁の母よりヤリキリをしまして、末廣の盃で媒がノミコミと云ふて局を結ぶことです、禮式には左樣な事は御座ひません然し簡略にして主旨は充分徹する事です、

是にて婿の兩親も坐に歸ります、それ迄は他の客も待合せるのは義務でせう、本膳と二の膳をひかぬ前「臺引膳」と「燒物膳」とを一人前、座の中央に出し接伴人より相當の詞を述べますれば、一人毎に出すことの手數を用せず、時間の經濟上大々的の便利です「土產物」となる品は大底かやうになさるのがよろしい、さて膳部の総てを給仕人より撤退し、引續き「茶菓」を出します、客は之を受け形の如く茶碗を伏せ、給仕人はそれを勝手に下げ今回は三の膳を差上ます、

◉三の膳と結び盃

三の膳を一同に出しますと、客は法の如く是を取り箸を措きます、三の膳は本膳圖解の甲種にありましたのを出してもよいが單に「吸物膳」に「ひれつき」だけのせ、引盃にて出しても宜敷御座ひます、今茲に記述するのは一番簡便なものを撰びましたのです、即ち「三組杯」を出し、第一の盃を嫁の父飲み是を婿の父る渡し順次に婿方に流れます、第二の盃は婿の父飲み之を嫁の父る渡し順次に嫁方に流れます、接伴人は末坐に正面し婿方より流れ來る盃に酌をさせ一應置き、肴を頂戴して之を飲乾し又嫁方より流れ來りし盃をそれの如くなし、二膝ばかり進出で「この末廣にて差上たけれども――略儀ながら私し、結び納めたう御座ひますから不惡御承知くだされたし云云」と云ふ旨意にて詞を述べ、兩方の酌人より其盃に注がせ之を飲乾し、三枚共重ね直しますと給仕

は是を引ます、酌人は初めより左右に分れ肴押も左右に分るれば一段と早ふ御座ひます、謠も三番此席に用ゐます是が終りますと、膳部を引き「陶器盃」に「吸物椀」其他の肴を二種のせて燗酒を上げますから、袴、羽織を預り次第〳〵に肴も運ばれ互に打解けて、兩家の親睦を祝する宴會に移ります何時迄も嚴格なる式のみにては、究窟を感じますのですこの位ひにて宴會を初めます、

◉床盃

本座は既に右往左往の賑ひ、夜も早明けなんとする頃迄も花嫁を席に置いては「床盃」の段にもならざれば、大概にして嫁を部屋に案内し茲に又婿君と共に、千歳を契る部屋盃を致させますそれを一般に間違はせ、三々九度を部屋の内にて行ふやうになりて居ります、嫁は一生一度の事なれば大底の事は我慢して、決して色にも出す事はなりません大事の役もそれ〳〵かたつき、殘るは只この部屋盃――女媒か待女郎の大切なる役なれば深き注意のあらまほし――さて其盃事は婿より初めて、嫁にさす時キットしたる詞がある、此一言を「初言」と唱へて生涯に渡るべき大切なること なれば輕忽に云ふべき事でない、嫁も盃を頂戴し其初言に對する返答あるべし「嫁入談合柱」と云ふ古き書にかくもあらんと記したる事を紹介しませう、其盃は列座の一人受納めてよろしい。

婿曰「此度深き縁ありて、夫婦となること一世の契にあらず、それにつけ此方の兩親へ孝行を盡し給はるべし、又追ては臺所の取締も其方の役なれば、萬事母の所作を見習ひ給へよ、家相續のために嫁入せしこと故、平生を大切に致しくれられよ、幾千代かけてこのこと賴む……」

嫁は此詞を聽き嬉しさ恥かしさ、何と答も詮方なく口の内にて詞も途切れ〳〵、乍去茲が千萬兩の價値處です、さてお答へなさる詞の節は、

嫁曰「何事も御申聞けのこと畏まりぬ、私事愚なる者――何分御目にもれる事、多かるべきとそれのみ案じ申す、幾度も〳〵御申聞けたまわり度、行末久しく御情け掛け給はんこと願上まつる……」

この嫁の詞の内には眞情こもり短き詞の節なれど、意味こそ千萬言にも勝るべき顏赤らめて思切つたる心の内、なんぼう愛しきことで――世の娘達もこの條を心に入れ返し詞のあるべき事です、

◉翌朝のこゝども

翌朝は新夫婦もなるべく早く起ることです、嫁の着物は「紅」きがよしと古書に見へたり、然し御好の品にてよろしかるべし、實にや朝湯上りにケショウして夫と共に膳に向ひし心の内、末々迄も忘れねば家庭に風波の起らふ筈なく、平和の神の使ひとて一層の心あるべき事です、

婿方より二日目の朝嫁の親里へ、夫婦睦じく家内賑々しき由申送ります、五日目には五日歸りとて花嫁が親里にゆき、五日間逗留して婿の内へ歸りますので「花歸」また「十日歸」りとも申します其間「部屋見舞」――「里見舞」とがありますけれど、こんなことは一々記しません別段定りたる法式とてはなく、何れも都合よく定めてよろしき事です、

◉婿入

三日目の祝過て古流では、婿入の式を擧行致しますが、當今は婚禮式の前後先方と交渉次第、何れにしても宜敷く御座ひます、其婿入は三組盃にて　舅三献飲み婿にさし、婿二献のんで一献加へ舅へ返します、舅三献のみ其盃を納め、姑三献飲みて婿にさす婿三献して姑に返し、姑三献して之を納め終に婿三献のみて舅にさし舅三献して茲に盃を納めます、此時「引出物、打躬、腸煮」等出ます只今は之を略にして、父一献飲み婿受け父に返し第一の盃を納め、第二の杯は姑飲み婿受姑に返し第三の盃は父のみ婿受けそれを、列坐の親戚が受納めます、

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

其外「披露の宴會」とか「膝直し」と云ふ事は一定したる法式もなければ程に應し分に從ひ、決行なされて差閊へありません、

◉婚禮の際に於ける忌詞

かへす、わかる、きる、もどす、のく、さる、さむる、うすひ、さらへ、むるん、しりぞく、あく、あさひ、はなる、いとま、ひまとる等は給仕人といるども注意することです、

◉結納の目錄

目錄には「御茶目錄」及「土產目錄」或は「荷物目錄」と云ふ種類があります、何れも奉書か杉原に墨黑々と認めます、六折半にと古式には定めてありますけれど、當今は奇數に折れば何程にても よろしゆふ御座ひます、茶目錄は結納の時、土產目錄は嫁入の時です、

月以　一家内喜多留　一御小詩懇末茶御目
誰　一添樽屋鯛　一帶袖留夫廣　女　斗錄
日上　様　一尾荷筋重折連對　某

是は「結納之目錄」です

受取目錄の認方は右の通り列記し、最後に「右之品々幾千代久敷受納申上候也」何誰樣――婿の父の姓名も少し細く書ます「土產目錄」は品數も多く御座ひますから別に目錄を添ます、それを即ち「別目錄」と申します、

月　日
以　盡生餌　鰹　鯛　昆　鯛　御　自　末　御　目
何　鯛　樽　飾　布　帶　袴　麻　廣　熨　錄
々　日上　斗
樣

菜　尾　荷　何　何　何　――　仝　何
尾　荷　連　連　折　筋　着　折

別に目錄を認めるのは嫁の父母其他に限ります即左の如く書きます、

月　日
以　兄弟姉妹樣へ

――――――母上樣へ――――父上樣へ――――目錄

是は嫁より婿に持行く「土產目錄」です、

其他板元より給仕人さては下男下女に至る迄それ〳〵の志を運ぶのです、

外に荷物目錄は、簞司より長持を書き其他は順序に定りがない、何品よりしたゝめてもよろしい、

總て目錄の書方は、古流の形により一定すれば順序を立てられますが、當今は品物も異り數も亦多く御座ひますから一々確定致しかねます、右に示しましたのもたゞ一般を記したものであるから、其思召を願ひます、

右の物品を受取ります時は、古流によりますと手數がいろ〳〵ありますけれども、今は「宰領」より物品と目錄とを引合せて進上致しますので、それを改めて一々受取り床に飾りて一同を饗應致します、以上は多く「嫁入前」に持參し、本客と時間の都合上衝突するやうになりますから、相方共に其心得ありてなるべく早く結了するやうに、致したきものです、

小笠原武田逸見之三流一派　新式禮法書　終

337
161

大正三年三月十三日印刷
大正三年三月十五日發行

著者　佐賀縣三養基郡田代村大字田代貳百四十番　八雲香堂

印刷所　佐賀縣佐賀市松原町百二十一番地　西肥日報株式會社

印刷人　仝所　中村源太郎

終